熊本県文化財調査報告第174集

二本木遺跡群

整備新幹線駅整備調整事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

熊本県教育委員会

遺跡周辺航空写真

熊本県文化財調査報告第174集

二本木遺跡群

整備新幹線駅整備調整事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県に存在する文化財は、全国的にも著名なものも多く、県民の皆様のかけがえの無い貴重な財産となっています。また、埋蔵文化財と呼ばれる土地に包蔵された文化財もその価値は何ら異なること無く、われわれに対してさまざまな情報を提供してくれます。

この報告書は、熊本駅の周辺といういわば街の中心地においておこなわれた発掘調査の結果の記録です。現代に生きるわれわれと、過去にこの土地に生活していた人々との関わり方の一つが、この遺跡から得られた情報を後世に伝え、活用していくことだと考えております。熊本県の歴史を学ぶ上で、また現代に生きるわれわれにとって、埋蔵文化財をより深く理解していくための一助となれば幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導、助言をいただいた諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成１１年3月３１日

熊本県教育長　佐々木　正典

例　言

1　本書は、1996年２月～1996年３月にかけて実施した、熊本県熊本市田崎１丁目に所在する二本木遺跡群の発掘調査報告書である。
2　調査は、整備新幹線駅整備調整事業に伴う緊急発掘調査として実施した。
3　調査は、日本鉄道公団九州新幹線建設局の依頼を受けて、熊本県教育庁文化課が受託事業として行った。
4　整理・報告は、平成10年度（1998年）に行った。
5　出土遺物は、熊本県文化財収蔵庫で整理作業を行った。
6　発掘調査現場での実測及び写真撮影は、帆足俊文、荒木聖子が主に行った。
7　遺物の実測は、主に帆足、村田百合子、赤坂希が行った。遺構製図及び遺物製図は荒木、赤坂が中心におこなった。遺構写真撮影は、主に帆足、荒木が行った。遺物写真撮影は、山城敏昭が主に行い、焼きつけは、主に帆足が行い、一部、外部委託した。
8　遺跡内におけるプラントオパール分析は、株式会社　古環境研究所に委託した。
9　遺物観察表は村田が主に作成し、帆足が補助した。
10　本書の執筆は、帆足が行った。
11　本書の編集は、帆足が行った
12　出土遺物は熊本県文化財収蔵庫に保管している。

凡　例

1　本書に使用したレベル（Ｌ＝）は標高を表し、方位は座標北で示した。
2　遺構の深さは、特に断わりがないものは、検出面からの深さである。
3　出土遺物の番号は、全て通し番号を付した。遺物観察表には、報告書の掲載番号を示した。
4　遺構の図において，
を付すことで表した。記号は以下の通りである。
　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＰ：土坑
5　現場での遺構実測図の縮尺は、1/20を基本とした。
6　土器の図については、復元図及び完形の図については、中心線より右に断面及び内部を、左に表面を表現する。復元不可能なものは、断面及び拓本を添えた。

目　　次

巻首図版（カラー）
序文
例言

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯
第1節 調査に至る経緯 …… 1
1　調査の経緯と目的 …… 1
2　予備調査の経過 …… 1
3　発掘調査の組織 …… 2
第2節 調査の方法と経過
1　調査区の設定 …… 3
2　調査の方法と経過 …… 3
第Ⅱ章　遺跡の概要
第1節　地理的環境 …… 6
第2節　歴史的環境 …… 6
第Ⅲ章 調査とその成果
第1節 遺構と遺物 …… 11
1　調査手順と概要 …… 11
2　遺構 …… 14
3　遺物 …… 18
(1) 遺構出土の遺物 …… 18
(2) 包含層出土の遺物 …… 18
第Ⅳ章 調査の成果
第1節　遺構について …… 34
第2節　遺物について …… 34
付編 自然科学的分析 …… 41

写真図版
報告書抄録
奥付

表　目　次

第1表-1 周辺遺跡地名表（1） …… 7
第1表-2 周辺遺跡地名表（2） …… 8
第2表　二本木遺跡群出土遺物観察表（1） …… 37
第3表　二本木遺跡群出土遺物観察表（2） …… 38
第4表　二本木遺跡群出土遺物観察表（3） …… 39
第5表　二本木遺跡群出土遺物観察表（4） ……

挿図目次

第1図　調査区周辺図 …… 5
第2図　周辺の遺跡 …… 9
第3図　調査区基本土層 …… 11
第4図　遺構配置図 …… 13
第5図　調査区内ベルト土層断面 …… 15
第6図　遺構実測図（SD04,05,06） …… 16
第7図　遺構実測図（SD07,08） …… 17
第8図　遺構出土遺物実測図 …… 19
第9図　13層出土遺物実測図（弥生土器） …… 20
第10図　13層出土遺物実測図（丸瓦） …… 21
第11図　13層出土遺物実測図（丸瓦） …… 22
第12図　13層出土遺物実測図（平瓦） …… 23
第13図　13層出土遺物実測図（土師器、須恵器、瓦質土器） …… 24
第14図　13層出土遺物実測図（青磁、白磁） …… 25
第15図　12層出土遺物実測図（縄文土器、弥生土器、土師器） …… 27
第16図　12層出土遺物実測図（丸瓦） …… 28
第17図　12層出土遺物実測図（平瓦） …… 29
第18図　12層出土遺物実測図（平瓦） …… 30
第19図　12層出土遺物実測図（平瓦） …… 31
第20図　12層出土遺物実測図（青磁、白磁） …… 32
第21図　その他の出土遺物実測図 …… 33

図 版 目 次

巻首図版　遺跡周辺航空写真

図版 1　航空写真
図版 2　航空写真
図版 3　遺構写真
図版 4　遺構写真
図版 5　遺構写真
図版 6　遺物写真
図版 7　遺物写真
図版 8　遺物写真
図版 9　遺物写真
図版10　遺物写真

第Ⅰ章　調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

1　調査の契機と目的

昭和30年代頃から日本各地方の交通網を整備すべく、整備新幹線建設事業が計画され、その計画は、現在でも進行中である。九州新幹線は、地元の要望も強く、一定の継続性をもって計画されている事業である。現在では、新八代～西鹿児島間等において、計画が進められており、九州を縦断する足として期待されている。

博多～新八代間も、以前から計画されていたが、新八代以南が、路線計画等において若干先行していた。その為、具体的な路線検討、それに基づく埋蔵文化財関連の協議、調査等も、実際的な作業に着手する一歩、手前の段階であった。

事業の主管者である鉄建公団九州新幹線建設局は、地域の交通手段はもとより、自然、歴史的環境に十分配慮されている。それらを最大限に、尊重すべく、計画の策定段階から、行政機関を含めた関係各者との協議・調整作業をおこなっていた。本区間についも、概略計画の段階から、事前に、熊本県文化課へ相談があった。

その内容は、今後、計画が現実のものとなる可能性がある九州新幹線の路線計画についてである。その建設に際し、埋蔵文化財を含めた地域の歴史的・文化的な環境がどのような影響を受けるかとのことであった。新幹線は、大規模な事業であり、その路線内は、ほぼ恒久的に線路として使用される。また、その建設にともない、当然、計画されるであろう駅周辺の再開発計画地等も、ある程度、現在の歴史的・文化的環境を変質させる。埋蔵文化財と呼ばれる地下に包蔵される文化財についても、同様に、影響を受けることが予想された。その為、予定路線内においては、全区間、埋蔵文化財の所在に関する調査をおこない、今後の対応を協議する必要があることを説明した。

周知の埋蔵文化財包蔵地については、可能なかぎり、現状で保存することを前提とし、計画段階から、保存等の協議をおこなっている。しかし、事業の性格上、一部のみ、路線計画をずらすことが困難な場合がある。その為、やむを得ず、埋蔵文化財に影響を与えることがあるが、その場合には、次善の策として、工事着手前に、記録保存の手段として、発掘調査を実施することとなる。

2　予備調査の経過

今回、報告する事業地は、熊本県土地開発公社の所有地であり、新幹線の路線として決定している訳ではない。しかし、九州新幹線の整備事業に伴い、当地が、開発対象となることが、予定されていた。

熊本市田崎１丁目に所在する当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「二本木遺跡群」の範囲内に含まれる。上述したように、開発が計画されている土地であった為、遺跡台帳照合・現地踏査をおこなった。その上で、地中の状況を正確に把握すべく、文化課学芸員の長谷部善一が、平成８年３月６日～７日に確認調査を実施した。

その結果、遺物包含層を２層確認し、一部、遺構も検出した。この結果を踏まえ、事業が計画通りに実施される場合には、記録保存の措置として、事前に発掘調査が必要であるとの通知をおこなった。その後の協議の結果、計画地内において、発掘調査をおこなうことが決定された。その位置と範囲は、次章に記すとおりであり、調査面積は、707㎡である。

3 発掘調査の組織

(1) 現地調査、平成８年度

調査責任者　桑山裕好（文化課長）

調査総括　　松本健郎（主幹・文化財調査第２係）

調査担当　　帆足俊文（学芸員）

　　荒木聖子（嘱託）

(2) 整理・報告書作成、平成１０年度

調査責任者　豊田貞二（文化課長）

調査総括　　島津義昭（課長補佐・文化財調査第２係担当）

調査担当　　帆足俊文（学芸員）

　　荒木聖子（嘱託）

調査協力者　熊本市教育委員会、美濃口雅郎、竹田宏司

第２節　調査の方法と経過

１　調査区の設定

調査区は、開発対象幅の約20ｍ×40ｍの範囲を対象とした。重機による表土の除去から調査を開始し実測図作成の為の４級基準点測量とメッシュ杭設置作業を（有）埋蔵文化財サポートシステムに業務委託しておこなった。公共座標系を利用して、調査区及び遺構の位置を正確に記録する為である。メッシュ杭は10ｍ単位で設置し、東西、南北に区切られた正方形をグリッドと呼び南北方向にA～D、東西方向に１～３と記号・番号をつけた。そして、それぞれが交わるグリッドをＡ１区、Ｃ４区と呼称した。座標系と調査区・グリッドとの関係は、第４図に示すとおりである。

２　調査の方法と経過

先に述べた経過を経て、本調査を実施した期間は、平成８年１月29日～３月25日の約２カ月間である。

前項で述べたとおり、調査は、表土除去、４級基準点測量及びメッシュ杭設置作業から開始した。表土除去作業を開始したのが、１月29日である。排土の運搬にキャリアダンプを使用した関係と、表土層が厚く堆積していたことから、この作業には、４日間ほどを要した。

調査区の基本土層は、第３図のとおりである。当初、第５層を中世の遺物包含層と考え、表土除去作業も５層上面までを対象とした。５層上面で遺構検出を試みたところ、畑の畝痕と、砂質土が入る不定形な溝らしきものが存在した為、中世期の畑痕ではないかと考えて掘削作業を開始した。実際には、土師器の細片が含まれるものの、遺構はその時期に属すものではないことが判明した。調査員のミスであるが、それほど、当地は堆積が厚く、プライマリーな遺物包含層の把握が難しい。

サブトレンチを設定し、下層の状況の把握に努めた結果、５層より更に下層の12層と13層が、遺物包含層であることが確認された。調査開始前にも、このレベルに遺物包含層が存在することを、確認してはいたが、２層存在することまでは分かっていなかった。11層より上部は、調査対象とする必要が無いことを確認し、再度、11層までの堆積土を重機で除去することとした。

包含層の掘削は、土層の堆積状況を確認するためのセクションベルトを10ｍごとに東西・南北方向に十字に残しておこなった。12・13層の掘削時には、それぞれの層の境界で遺構検出を行う方針として、そのレベルに至るまでは、各グリッドごとに遺物を取り上げ、遺構検出面の遺物と、遺構埋土の遺物に関しては、その位置を、座標や図面で記録するという方法をとった。

12層は、明褐色粘質土の遺物包含層である。ただし、包含される遺物の時期は、縄文時代から近世までと様々である。縄文土器、弥生土器の数量は少なく、ほとんど無視できる程ではある。しかし、その他にも、同一層位内の遺物がかなりの時間幅をもち、遺物自体も、あまり良好な残存状況では無い。確実な時期決定はできず、包含層の時期の下限をおさえることしかできない。13層上面で遺構検出を試みたが、遺構を検出することはできなかった。

なお、12層の掘削段階に、水田遺構が存在したのではないかという視点をもった。そうなると直上の12・13層が畦畔、耕作土になるはずである。証明する方法は、まず、畦畔、溝などから、水田区画を検出することである。平面でみつけることができない場合には、断面形で、畦畔らしき凹凸をみつけることで、その傍証としようとも考えた。また、発掘調査の成果を検証する意味から、稲のプラントオパール分析をおこなうことも一つの手段と考え、（株）古環境研究所へ分析を委託した。分析は、12～14層付近を中心にして、比較試料として、表土層直下までサンプリングを実施した。詳細については、次章で述べる。この作業をおこなったのは、３月６日であり、更に、調査を急ぐ必要性が生じていた。

13層も同様に遺物包含層である。弥生時代の遺物が最も多いが、やはり、中世までの遺物も少なからず存在しており、包含層の時期決定は下限を示す遺物によらざるを得ない。なお、13層の掘削をほぼ終えた段階で、14層上面において遺構検出をおこなったところ、数条の溝とピットを検出した。溝は、1条だけが当該期のものであり、他のものは時期決定するに至らなかった。溝の掘削作業をおこない、溝の土層断面図の作成、写真による記録作業をおこなった。写真は基本的に、同一アングルに、モノクロとカラースライドを1カットずつ撮影している。また、先ほど述べた水田遺構の確認作業の一貫として、10mおきに残した畔の土層断面も、全て、図面と写真で記録を残したうえで、畔の撤去をおこなった。

なお、調査終盤の3月17日には、遺跡全景及び遺跡周辺の状況を記録するために、空中写真撮影をおこなった。その業者は九州航空株式会社で、遺跡周辺についても、なるべく広角に撮影したいと考え、セスナ機による撮影とした。

遺物取り上げ、遺構の記録作業が終了した後、調査終了状況の記録をおこない、発掘調査を終了とした。それらが終了し、プレハブの撤去、備品の搬出等の作業をおこない、現場作業員の方々は、3月25日に解散となった。その後、調査区の埋め戻し作業、遺物発見届の提出、調査費の精算作業等の残務処理をおこない、平成8年度の最終日である3月31日に、発掘調査に伴うすべての作業を終了した。

佐賀県
福岡県
大分県
長崎県
二本木
遺跡群
熊本県
宮崎県
鹿児島県
0
20km
坪井川
JR鹿児島本線
調査区
0
100m

第1図　調査区周辺図

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節 遺跡の立地と環境

１　地理的環境

九州島は日本列島の南西部に位置し、温暖湿潤な気候に恵まれている。熊本県は、その西側中部域に位置している。熊本県は、地理的に、三方を山に囲まれており、河川は、有明海が存在する西へ流れるものが多い。海に面した場所に広い平地が存在するため、気候的には、温暖湿潤で、内陸的な気候も加わった風土でもある。年平均気温は、平地で16℃以上であるが、夏季と冬季の寒暖の差は激しい。

降水量は、山地で2,000mmを超し、平野で1,800mm前後である。時期によっては、局地的な豪雨や多雨の現象がみられ、北部では、梅雨時に、南部では、秋季に雨が多いことが多い。

九州の地質は、松山・伊万里線以北と臼杵・八代線以南と、この両構造線に挟まれた長崎三角地域の、三地域に分けられる。熊本県は、北半部が長崎三角地帯に、南半部が外帯になっている。古生層の三波川式結晶片岩類は、天草南西部に、三郡変成岩類は、県北西部にみられる。中生層のジュラ紀層、三畳紀層は、臼杵・八代線の南側に帯状に入っている。第三紀層は、天草全域と臼杵・八代線以北の各地によく発達し、貫入岩類、酸性岩は、臼杵・八代線以北にわずかにみられる。

熊本平野は、大規模な火山噴出物をだした阿蘇山の西側に位置し、阿蘇火山の堆積物で形成された通称、熊本台地の西に広がる平野である。西側には、有明海が存在し、北西は金峰山、南は宇土半島の山地がそびえて、周辺の地域と区切られている。平野は、北東部に存在する阿蘇外輪山から西南方向に開けているゆるやかな傾斜の洪積台地と、白川を中心とした河川堆積によってできた有明海にむかう肥沃な南西部の沖積低地に二分されている。その面積は広大で、低地部のみで、約255km²あり、熊本台地を含めると、約755km²である。平野北部は、白川の流れを中心にして、井芹川、坪井川の流域である。南部は、緑川水系を中心とし、加勢川、木山川、浜戸川の流域である。

二本木遺跡群は、白川の西側に位置する。白川は、阿蘇カルデラがおもな流域で、県のほぼ中央部より、やや北側に位置する。源は、南郷谷の東部の高岳南東斜面である。ここを発した白川は、阿蘇南郷谷の水を集めて西方へ流れ、黒川と合流する。立野火口瀬をへて、熊本台地を通り有明海へと通じる。水量は、合流する黒川が、白川より若干多い。両河川が合流した下流域は、非常に水量が多く、上流の阿蘇地方での降水量が多い時には、流域の形も関係して、洪水が多い地帯でもある。

２　歴史的環境

二本木遺跡群は、熊本平野の中、白川の右岸に位置し、今回の調査区は、熊本市田崎１丁目117番の１に所在する。二本木遺跡群とよばれるこの遺跡群の西南部にあたる。

二本木遺跡群は、過去、飽田国府の推定地としての視点で注目され、昭和初期から研究されてきた。また、近年の調査量の増大による当遺跡群の性格や、歴史的位置付けについては、美濃口雅朗氏らによってまとめられているので、そちらを参照されたい。

当遺跡群は、地理的にも、歴史的にも若干の幅をもつ遺跡群である。調査地点等によっていくつかの異なる性格を示すことが知られているが、明確な遺構が確認される古い段階は、8世紀後半頃のようである。それから、9世紀後半～11世紀台、11世紀末～13世紀代と遺構・遺物が豊富な時期があり、最終的には、17世紀代が遺跡の終焉とされている。

第1表－1　周辺遺跡・地名表（1）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
172	島崎	島崎町島崎紙屋	縄文	包蔵地		
173	荒尾南	島崎町	縄文～中世	包蔵地		
176	谷尾崎	谷尾崎町	旧石器	包蔵地		
177	野添平	池上町野添平	縄文～中世	包蔵地		県では野添遺跡
178	谷隠軒跡	池上町	中世	包蔵地		
183	池辺寺塔遺跡群	池上町池上	古代	寺社		
187	池の上	池上町池上	古代・中世	包蔵地		
189	独鈷山遺跡群	池上町池上、城山上代町	古墳～中世	包蔵地		
190	花岡山・万日山遺跡群	横手町、春日町	古墳	古墳		万日山古墳群4基以上。長持型石郭、家型石棺横穴式石室
191	清水原	池上町	縄文～中世	包蔵地		
196	上代町遺跡群	城山上代町	縄文～平安	包蔵地		弥生前期土器
206	経塚道遺跡群	花園町柿原字経塚	弥生・古墳	包蔵地		巨石墳須恵器多数、合口須玖式
208	池亀	池亀町	弥生	包蔵地		板碑阿弥陀三尊、地蔵
209	本妙寺A箱式石棺群	花園町4丁目	古墳	埋葬		
210	本妙寺B箱式石棺群	花園町4丁目	古墳	埋葬		
211	本妙寺北	花園町4丁目	古墳～中世	包蔵地		
212	井芹城跡	花園町4丁目	中世	城		井芹氏の居城
213	井芹	花園町5丁目	弥生	包蔵地		黒髪式・須玖式甕棺多数
214	中尾丸城跡	花園町4丁目	中世	城		文政7年供養碑
215	牧崎	花園町1丁目	弥生	包蔵地		甕棺14期以上
216	小山田	島崎町	縄文～中世	包蔵地		
217	釣耕園跡	島崎5丁目	江戸	園池	市	
	叢桂園跡	島崎5丁目	江戸	園池	市	
	百梅園跡	島崎5丁目	江戸	園池	市	
218	石神原	島崎町3丁目	弥生～平安	包蔵地		
219	千原台遺跡群	島崎町3丁目ほか	縄文～平安	包蔵地		
220	迎田	島崎町	縄文～平安	包蔵地		
233	稗田横穴群	池田町稗田字猪迫	古墳	古墳		6基以上
234	舟場	清水町津浦	縄文～中世	包蔵地		
238	京町台遺跡群	京町	弥生～中世	包蔵地		
239	寺原横穴群	京町	古墳	古墳		多数の横穴
240	京町2丁目	京町2丁目	縄文～近世	包蔵地		
241	伝大道寺遺跡群	京町2丁目	縄文～近世	包蔵地		伝大道寺跡を含む
242	内坪井	内坪井町	弥生	包蔵地		
243	安元元年笠塔婆塔身	坪井4丁目	古代	石造物	県	県重要文化財、本光寺
	安元元年笠塔婆	坪井4丁目	古代	石造物		市指定建造物
244	夏目漱石内坪井旧居	内坪井4丁目	明治	石造物	市	市指定建造物
245	藤園中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	包蔵地		甕棺群あり
246	熊本城跡遺跡群	古城・古京・千葉城町	古墳～近世	包蔵地		
247	熊本城跡	古城・古京町・千葉城町	近世	城	国	国指定重要文化財・国指定特別史跡、加藤清清正慶長12年
248	旧細川刑部邸	三の丸・古京町	近世	建造物	県	県指定重要文化財
249	新馬借	新町三丁目	古墳～平安	包蔵地		須恵器
250	舟場町	新町二丁目、鍛冶屋町	弥生	包蔵地		甕棺群
251	山崎古墳	桜町	古墳	古墳		石郭
252	小泉八雲熊本旧居	安政町	明治	建造物	市	市指定建造物
253	辛島町	辛島町	弥生・古墳	包蔵地		
254	古町（旧唐人町）	唐人町、古町ほか	弥生～明治	包蔵地		
255	戸坂	戸坂町	弥生～平安	包蔵地		甕棺群
256	戸坂御田尻	戸坂町	縄文～中世	包蔵地		
257	吉祥寺横穴群	横手町	古墳	古墳		
258	花岡山陸軍埋葬地	横手2丁目	明治	墓地	市	明治9年神風連の変戦死者
259	妙解寺細川家霊廟及び門	横手2丁目	江戸	建造物	国	
	妙解寺細川家墓地	横手2丁目	江戸	建造物	県	
260	細川家菩提寺妙解寺跡	横手2丁目	江戸	建造物	市	市指定跡
261	山由雲院（春日寺）	春日3丁目	江戸	寺社	市	市指定跡
262	北岡神社境内古墳	春日1丁目	古墳	古墳		円墳鳥文鏡
263	北岡横穴群	春日1丁目	古墳	古墳		
264	石塘（白川橋）	二本木1・2丁目	弥生～中世	建造物		
265	二本木遺跡群	二本木1・2丁目ほか	弥生～中世	包蔵地		
266	八島町	八島町	弥生	包蔵地		
267	道城方	蓮台寺町道城方	弥生・古代	包蔵地		
268	南新宮	蓮台寺町南新宮	弥生・中世	包蔵地		
277	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	包蔵地		
278	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地		一帯に甕官群
279	旧第五高等中学校本館・化学試験場・表門	黒髪2丁目		建造物	国	国指定重要文化財、イギリスのフィーン・アン様式
280	子飼	子飼町	縄文～中世	包蔵地		
281	大江白川	大江1丁目	縄文～平安	包蔵地		甕棺
282	新屋敷	新屋敷町	弥生～中世	包蔵地		弥生環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器

第1表－2　周辺遺跡・地名表（2）

283	大江遺跡群	大江3丁目	縄文～明治	包蔵地		
284	大江義塾跡（旧徳富邸）	大江4丁目	明治	建造物	県	大江義塾：県指定遺跡、徳富旧邸：市指定史跡
285	本庄（熊大病院敷地）	本荘2丁目	古墳～平安	包蔵地		熊大埋文調査室調査
286	不動院跡の六地蔵跡	九品寺4丁目	中世	石造物	県	県指定重要文化財
287	本山城跡（本庄城跡）	本山町城の本	弥生～中世	包蔵地		元弘年間に詫麻宗直
288	世安池田	世安町池田	弥生～中世	包蔵地		輸入陶磁器など
289	平田町	平田1丁目	弥生～平安	包蔵地		甕棺群
290	出水国府跡	九品寺、国府、国府本町	弥生～中世	包蔵地		
292	国分寺跡	出水1丁目	縄文～中世	包蔵地		県・市による多数の調査あり
380	古護藤	八文字町	弥生～中世	包蔵地		
381	白藤遺跡群	島町、白藤町ほか	弥生～中世	包蔵地		
382	護藤遺跡群	護藤町	古墳～中世	包蔵地		
383	中無田遺跡群	護藤町	弥生・中世	包蔵地		輸入陶磁器（青磁）多数
386	重富	画図町	古墳～平安	包蔵地		
389	近見	近見町	縄文～中世	包蔵地		
390	西無田	御幸西無田町	弥生～平安	包蔵地		甕棺、石包丁
391	明治天皇御幸御野立所	御幸西無田町山田堀	明治		市	市指定史跡
392	下乙地頭館跡	田迎町	中世	包蔵地		土塁残存
393	四才町陳屋敷	田迎町	中世	包蔵地		土塁残存
394	良町二石	田迎町	弥生・古墳	包蔵地		弥生前期土器出土
395	南高江西馬出	南高江町	弥生～中世	包蔵地		
396	中椎田	八幡町	古墳～中世	包蔵地		青磁
398	御幸木部遺跡群	御幸木部町	弥生～中世	包蔵地		地蔵文明7、阿弥陀天文2、観音寛政6
457	岳林寺跡	島崎町島崎	中世	寺社		五輪塔、大永銘板碑
458	城親賢の墓	島崎町島崎	中世	墓地		岳林寺境内墓地主墓、天正9年銘
459	霊樹庵跡	島崎町島崎	中世	寺社		
460	鬼塚さん古墳	島崎町三軒屋	古墳	古墳		
461	井芹五輪塔・宝塔群	花園町井芹	中世	石造物		
462	井芹城跡推定地	花園町	中世	城		
468	宗厳寺跡	清水町津浦	中世	寺社		寛文12年
470	池田八幡放牛地蔵	京町	近世	石造物		享保10年
471	往生院境内石造物	池田町	中世・近世	石造物		豪潮宝篋印塔・放牛地蔵
472	採釣園跡	坪井4丁目	近世	園池		
473	長岡監物屋敷跡	坪井4丁目	近世	包蔵地		
474	成就院大喜山覚勝寺跡	中坪井町	中世	寺社		
475	浄国寺跡	壺川1丁目	中世	寺社		
476	金剛寺南乾山跡	新坪井町中坂	中世	寺社		弁天窟、25菩薩あり
477	仙勝院跡	京町1丁目	中世	寺社		
478	円光寺跡	京町1丁目	近世	寺社		藤崎宮社家代々墓あり
479	釈将寺跡	京町2丁目	近世	寺社		
480	報恩禅寺境内石造物	坪井3丁目	中世	石造物		豪潮宝篋印塔・坪井の跡
481	お薬園跡	薬園町	近世	包蔵地		藩主重賢開園
482	遠矢塚	島崎町	中世	墳墓		
483	新町古寺跡・高麗門跡	新町3丁目	近世	寺社		
484	古往生院跡	古鍛冶屋町	近世	寺社		阿弥陀堂石主、六地蔵、十三塔、五輪塔
485	板屋町・細工町寺院群	板屋町、細工町	近世	寺社		
486	願行寺跡	横手町	近世	寺社		
487	横手町寺院群	横手町	近世	寺社		
494	田迎下乙	田迎町田井の島	古代・中世	包蔵地		六地蔵、一字一石
295	御幸笛田神社	御幸笛田町	弥生～中世	包蔵地		
496	良町	田迎町良町	弥生	包蔵地		
497	南高江六地蔵塔	南高江町居屋敷	中世	石造物		
498	高江城跡	南高江町居屋敷	中世	城		
499	蓮台寺検垣塔	蓮台寺町居屋敷	中世	石造物		蓮台寺境内三重石塔
500	無漏寺跡	世安町川端	中世	寺社		古塔碑
534	七軒町	七軒町	縄文～中世	包蔵地		
535	一夜塘	小幡町	近世	建造物		
536	上河原	黒髪町	縄文～古代	包蔵地		
538	仁王堂板碑	池上町	中世	石造物		
540	出町土居跡	京町	近世	城		
541	光明寺跡	呉服町万2丁目ほか	近世	寺社		
542	峰雲院跡墓地	中坪井	中世	墓地		
544	熊本駅前の石塘	春日町	近世	建造物		
545	花畑館跡	花畑町	近世	包蔵地		
546	代継ぎ神社の層塔	本荘3丁目	中世	建造物		
547	浄信寺跡	呉服町万2丁目ほか	中世	寺社		
548	熊本平野条理跡		古代・中世	生産		
549	熊本平野条理跡		古代・中世	生産		
550	熊本平野条理跡		古代・中世	生産		

※遺跡番号は「熊本県遺跡地図」（熊本県教育委員会発行）と対応

第2図　調査区周辺図

過去、飽田国府の推定地とされたのは、二本木遺跡群の南端部、現在の古町小学校付近である。当地では、トレンチ調査や遺物採集がなされており、8世紀後半～９世紀の土師器、須恵器等が出土、採集されている。しかしながら、国府の内容にせまる遺物や遺構等は確認されておらず、直接、国府跡に関連する本格的な発掘調査はおこなわれていない。そのため、国府の存否を含めて、その詳細は不明である。ただ、近年、熊本市教育委員会において実施された隣接地の調査では、土器の陰陽形突起の出土や、方位を意識した溝が検出されたことから、官衙関連施設であるという可能性が指摘された。今後の更なる研究成果が期待できる。

出土遺物の量、質からも、当遺跡群の充実ぶりがうかがえる。回転ヘラミガキ土師器や、良質の須恵器の出土。また、官衙関連の遺跡に多い出土品や、陶磁器類の優品からも、そのことが言える。

これらの状況から、国府推定地のみでは無い、当遺跡群に関する研究も進展している。具体的には、近年の再開発に伴う熊本市教育委員会による発掘調査や、「熊本市史」の編集等がある。その内容については、ここで触れるべくも無いが、着実に成果が蓄積されつつある。

遺構の種類や、遺跡の年代的な差が少なからず存在するため、それぞれを、歴史的に位置付ける作業も必要となっている。竪穴住居群の時期と、集落の存在形態についての視点や、掘立柱建物の軸線や形態による性格の推定もなされている。また、前述した、中心的な数時期ごとの、遺跡の性格の検討も必要であろう。これらは、国府の存続時期や存在そのものに関する重要な視点となっている。

なお、遺跡の地理的な立地環境も重要である。白川の流域である当遺跡群は、国府の存否論争の場においても、論点となっている。つまり、洪水の常習地である当地を、わざわざ選定する理由があるのかという点である。貿易に関連して、水運を活用したと考える意見に、妥当性があるとされるが、それに関して、周辺の遺跡との、時期的な整合性も考慮せねばならない。ただ、現在までの調査で、国府の痕跡が明確でないことも、洪水の影響であるともされており、今後の課題の一つであろう。

しかし、近年の発掘調査の成果をもとにした、これらの遺跡群の総合的な研究は、着実に進みつつある。地道な作業の成果が、当遺跡群の性格の解明に近づいている段階であることは間違いないであろう。

第Ⅲ章　調査とその成果

第１節 遺構と遺物

１　調査手順と遺構の概要

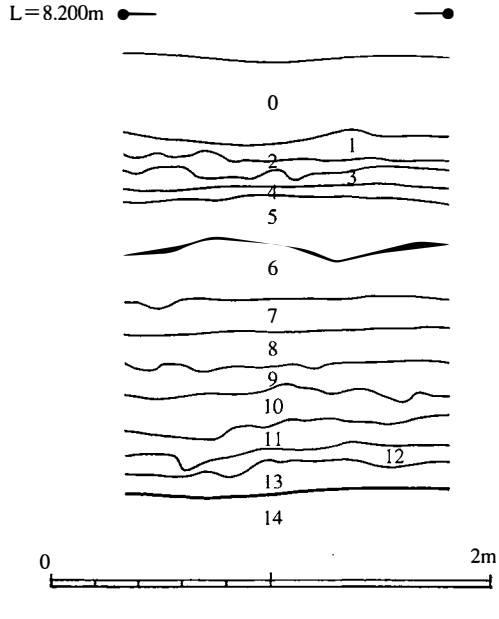
第１章でも述べたように、当調査区で遺構が検出されたのは、14層上面のみである。しかも、確実に遺構としてとらえることができるのは、SD04だけであり、他の溝は時期不明である。ピットも人為的なものとは考えにくい。すなわち、遺物包含層である13層及びもう１層上の12層についても、隣接地もしくは、ある程度の距離の場所から遺物を含んで流れ込んできた可能性が高い。

ここでは、さらに詳しく、調査の流れに沿って、当遺跡についての見解を示したい。

ここで、当地の基本土層図を示す（第３図)。これは、A3区の東側の、表土除去作業をおこなっていない調査外の壁面を記録したものである。１層から11層までは、比較的新しい時期に堆積した土層であり、表土として取り扱った部分である。当初、一部、表土はぎ作業をおこなった時に、５層上面に畑の畝跡を検出した。これは、近・現代の畑面である。５層より上層にも、ある一定の期間の畑地耕作跡らしきもの存在する。

当初、更に下層の８層上面を中世の遺構面であると考え、遺構検出作業をおこなっていた。同層には、灰色砂層が埋土となった溝らしき形状のものを３条、存在した。これは、溝の形状を呈するが、人為的に掘削した様子は見受けられなかった。中世の土師器片が混入しており、遺構とは呼べないが、当該期の包含層の可能性も考えていたが、その後、層序を再検討した結果、その認識が誤りであったことが判明した。最終的には、更に下層の、遺物包含層である13層の上層までは、新しい時期に洪水等によって堆積した層であるとの結論に達した。

結果的に、実際に調査の対象とすべきは12・13層の遺物包含層と14層上面であった。12・13層ともある程度の遺物量を含む遺物包含層であるが、どちらに含まれる遺物も、それぞれかなりの時間幅をもつものであった。



0
1 } 表土・客土
2　褐色土
3　黒褐色砂質土
4　明褐色弱粘質土（少量の赤色粒を含む）
5　明褐色粘質土（少量の赤色粒、粘質ブロックを含む）
6　褐色弱粘質土
7　明褐色弱粘質土（赤色粒、粘質ブロックを含む）
8　褐色砂質土
9　明褐色砂質土
10　明褐色弱粘土（赤色粒含む）
11　黒灰色砂質土（粘質土のブロックを含む）
12　明褐色粘質土（砂のブロックを多く含む）
13　褐色粘質土（赤色ブロックを多量に含む）
14　黄褐色粘質土（場所によっては赤褐色を示す）

第3図　調査区基本土層

12層は、縄文土器から近世陶磁器までを含み、13層上面においては、全く遺構が検出されないことからも、完全な流れ込みの資料として扱った。ほとんどが破片であり、全体形が分かる資料は少ない。13層出土遺物も同様であるが、破片となり、ローリングをうけているため、それらの遺物の時期や、元来、使用されていた場所について、正確に類推することは難しい。

13層は、赤色ブロックを多量に含む褐色粘質土層である。こちらも、遺物包含層であるが、12層の一部を含めて、別の視点で調査をおこなった。それは、当地が水田だったのではないかという視点である。赤褐色粘質土である14層が、鉄分の集積が激しいために、そのような色調となったと考えたからである。そうなると、もう１層上部に存在する13層が、水田の耕作土であるか、若しくは、畦畔等になる。単純な遺物包含層の掘削作業としておこなうのではなく、12層中位からごく薄く、徐々に削っていきながら、畦畔らしき、土層の凹凸を確認しようと試みた。また、平面での確認の参考にと、ベルト沿いにサブトレンチを設定して、断面形からも、その検出に努めた。調査区内の土層断面図は、第５図に示したとおりであるが、結果的に、畦畔もしくは、水田に伴う遺構らしきものは、確認できなかった。その結論として、次の４点が予想される。

（1）当地に水田遺構は存在しなかった。(2）水田は存在して、畦畔も残っているが、調査中に認識することができなった。(3）かつて、水田は存在したが、その耕作土が洪水等で流されてしまい、現在、我々が12層・13層と呼んでいる遺物包含層が流れ込んで堆積した。(4）水田は存在して畦畔も流されてはいないが、調査区内では検出できないほどの大区画の水田であった。以上、四つのケースである。実際に、発掘調査において、畦畔を確認することができなかたので、通常なら、(1）の水田ではなかったことを結論とするところであろう。

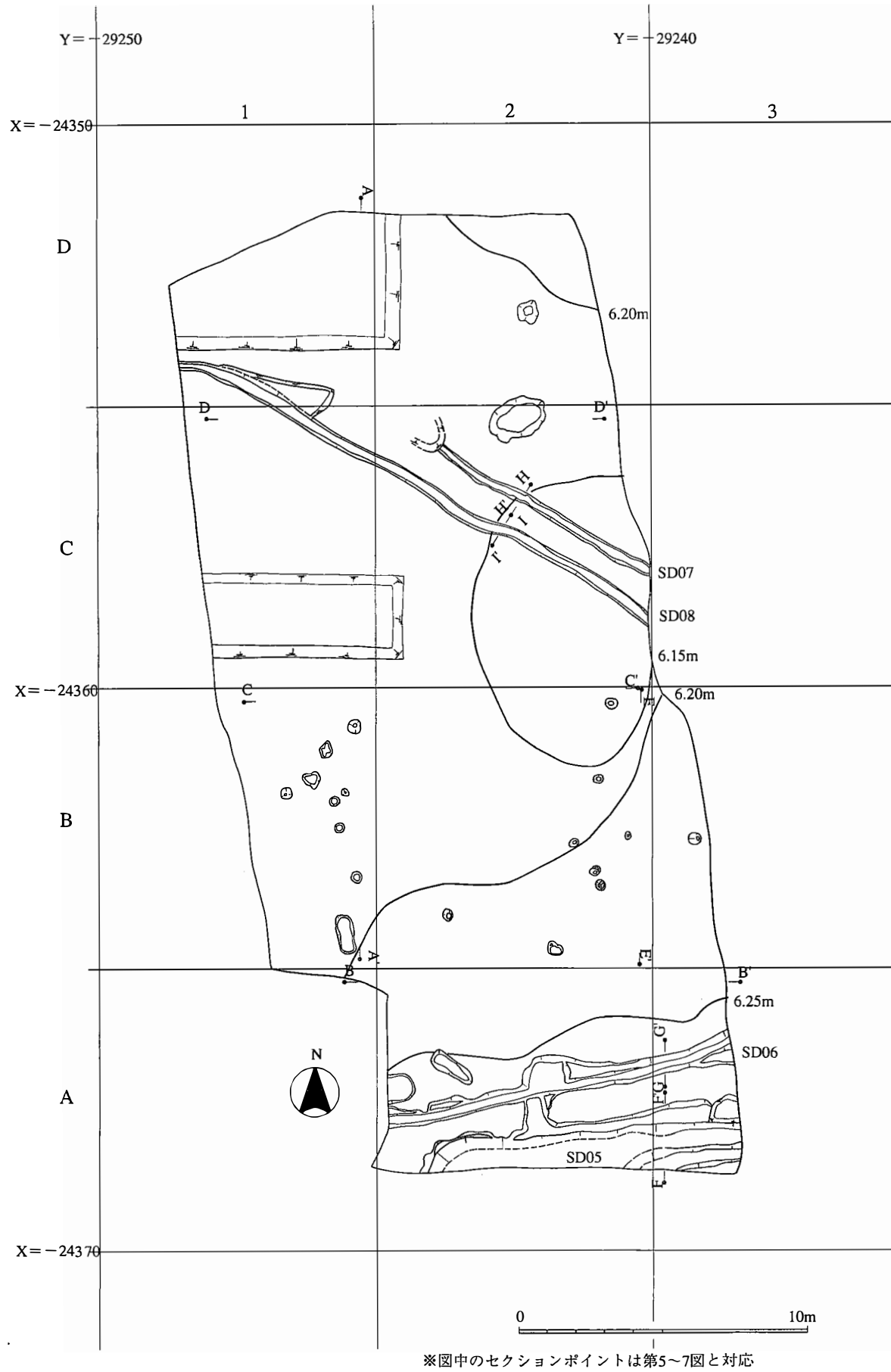
しかし、水田跡の可能性を即座に捨てきれなかったため、自然科学分析に、その鑑定作業の一部を依拠した。具体的には、(株）古環境研究所によるプラントオパール分析である。プラントオパール分析は、水田が存在したと推定される場所において、その土壌から試料をサンプリングし、植物が枯れたあとにも半永久的に残るプラントオパールを検出する方法である。当遺跡では、Ｂ１区西側の壁面と、Ｂ２区においては、水田耕作土・畦畔の可能性がある12・13層からサンプリングをおこなった。

分析結果は、巻末に付編として収録したとおりである。結論のみ、要約すると、当遺跡においてサンプリングした８層下部から12層までの試料から、プラントオパールが検出された。そして、水田耕作土の可能性がある12・13b層において、その数値に明瞭なピークが認められるというものである。その結果から、それらの層準で稲作が行われていた可能性が高いとの考察がなされている。この結果を一つの参考資料として考察してみたい。

調査時に考察したのは、14層が水田の床土であり、その上部の12層及び13層が畦畔もしくは耕作土であるということである。そして、自然科学分析の結果も、13層においてプラントオパールの明瞭なピークが認められるというものだった。13層直上の12層においては、極端にその密度が少ないということから、上層からの混入の可能性は低いとも考えられている。時期的には、12層の堆積前に、当地で稲作がおこなわれていたという可能性が考えられる。

さて、ここでこの結論を断定するためには、三つの問題点がある。まず、第１に、発掘調査において畦畔を認識することができなかったという点である。この要因には、先にあげた（1）・（3）の理由が考えられる。ここでは、分析結果を最大限に評価して、(1）の水田ではなかったとの結論を、とりあえず除外して、考えてみたい。

第２に、水田であったとすると、先にも述べたように、12・13層が、畦畔もしくは耕作土となる。ただし、畦畔や耕作土とすると、遺物が多すぎるのではないかという問題である。両層に含まれていた遺物は、



※図中のセクションポイントは第5～7図と対応

第4図　遺構配置図

後述するが、破片がほとんどであり、残存状況も悪く、個体数からも良好な試料とはいえない。しかながら、逆に、水田の耕作土と想定すると、これだけの土器が入っているとは考えにくい。耕作土が流されて、付近から流れ込んだ土が堆積したと考えるのが自然であろう。その場合、検出されたプラントオパールは、当調査区のものではなく、近辺のものと考えざるを得ない。しかしながら、当調査区の14層は、鉄分の集積が激しく、水田の床土の可能性がある。両方の現象から、当調査区も、もともと水田であり、その耕作土が流出した後、調査区近辺にも存在した水田を経由して、遺物を含んだ土が堆積したという可能性を考えておきたい。

第3に、水田の時期の問題である。通常、遺構や包含層の時期は、遺構の埋土や包含層に含まれる土器によって決定する。厳密にいえば、住居跡等の床面直上の遺物でない限り、その埋没時期の下限を捉えることしかできない。当遺跡においても、13層から高い密度のプラントオパール検出されたが、前述のとおり、13層が、当地に、当初から存在していたとは断定できない。時期をある程度限定するためには、13層より後に堆積したことが確実な、12層に包含される遺物の時期で、下限を決めることとしたい。

2　遺構

検出された遺構は、溝とピットのみである。ピットは人為的なものとは考えにくく、溝は、形状、埋土からSD04のみを遺構と判断して、記載する。ただし、あくまで、調査時の判断であるので、後の遺物の項では、それぞれの埋土の遺物も掲載する。

SD04（第6図）

調査区南端に、断面は、逆三角形の形状で、底面はわずかながら平らな形となる。東西方向で掘りこまれている。溝の東側では、溝上部の幅は、約210cm、深さは約70cmを測る。西側へ進むと、徐々に深く、幅も若干広くなる。調査区外との境界であったため、危険防止の観点から最深部までの掘削をおこなっておらず、詳細は不明である。埋土は、13層からなり、弥生土器が多いが、中世の土師器皿、青磁片までもを含む（第8図）。開削時期、埋没時期を断定できる根拠は乏しく、埋没には、ある一定の時間がかかったものと考えられる。

SD05（第6図）

SD04のすぐ北に重なる様に存在する。遺構検出段階では、SD04と別の溝であると考えていたが、SD04の掘り形が崩れて拡がったものと考えられるため、途中から、SD04と同一のものであると捉え、明確に人力で掘削したと思われるSD04を遺構として扱った。出土遺物も同一の遺構のものとして考えている。

SD06（第6図）

SD04の北側に位置し、SD04とほぼ平行して掘りこまれている。断面形は、ほぼ方形であり、幅約40cm、深さ約20cmを測る。溝の規模は小さく、埋土も褐色土1層である。遺物も全く含まれていない。

SD07（第7図）

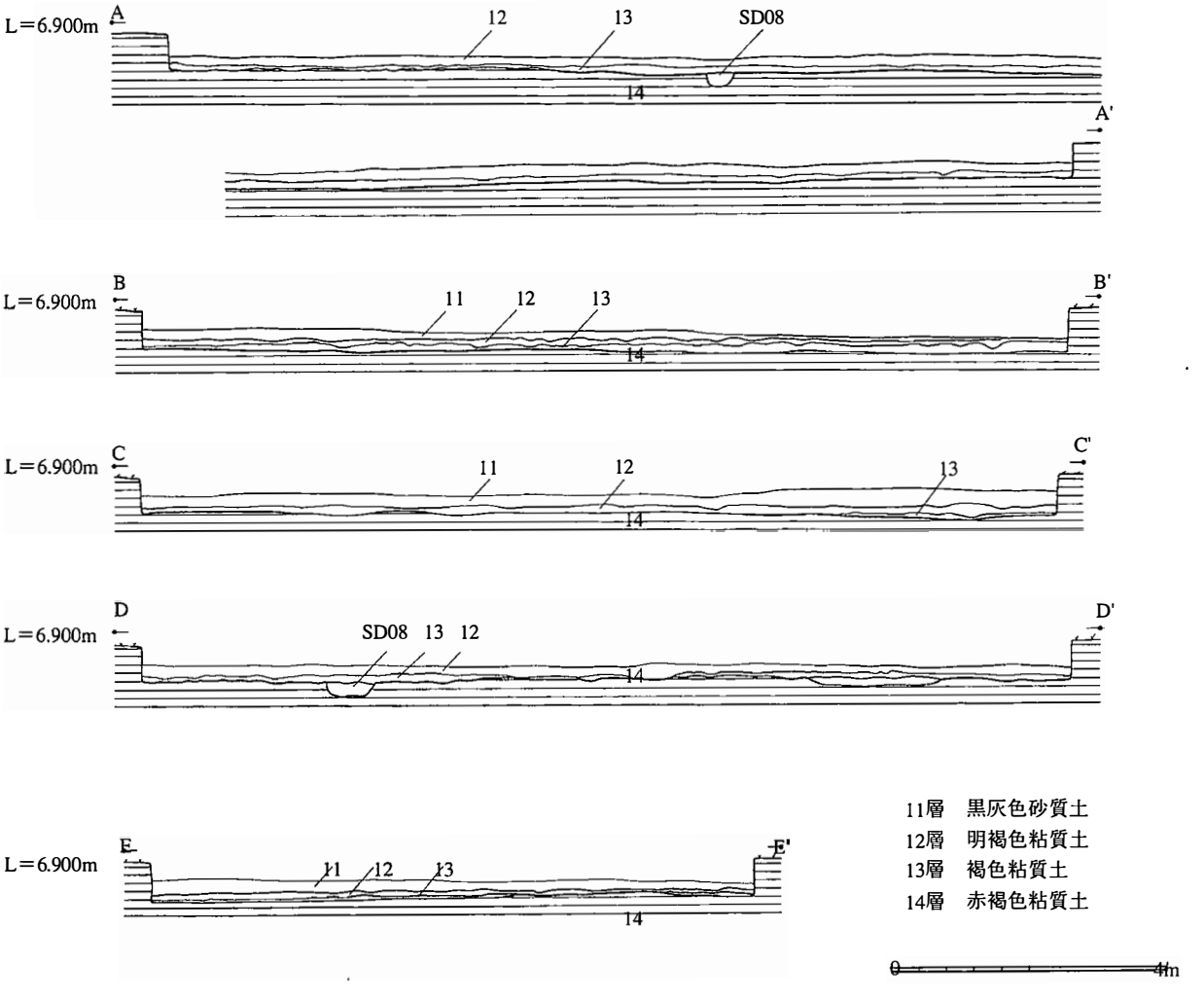
調査区のやや北側に、南東-北西方向に掘りこまれている。形状・規模ともに、SD08と類似しており、幅36cm、深さ24cmで、断面形は方形を呈する。北西端は、撹乱で削られており、それより先の部分については不明である。上部が削平をうけており、本来の深さではない可能性がある。

SD08（第 8 図）

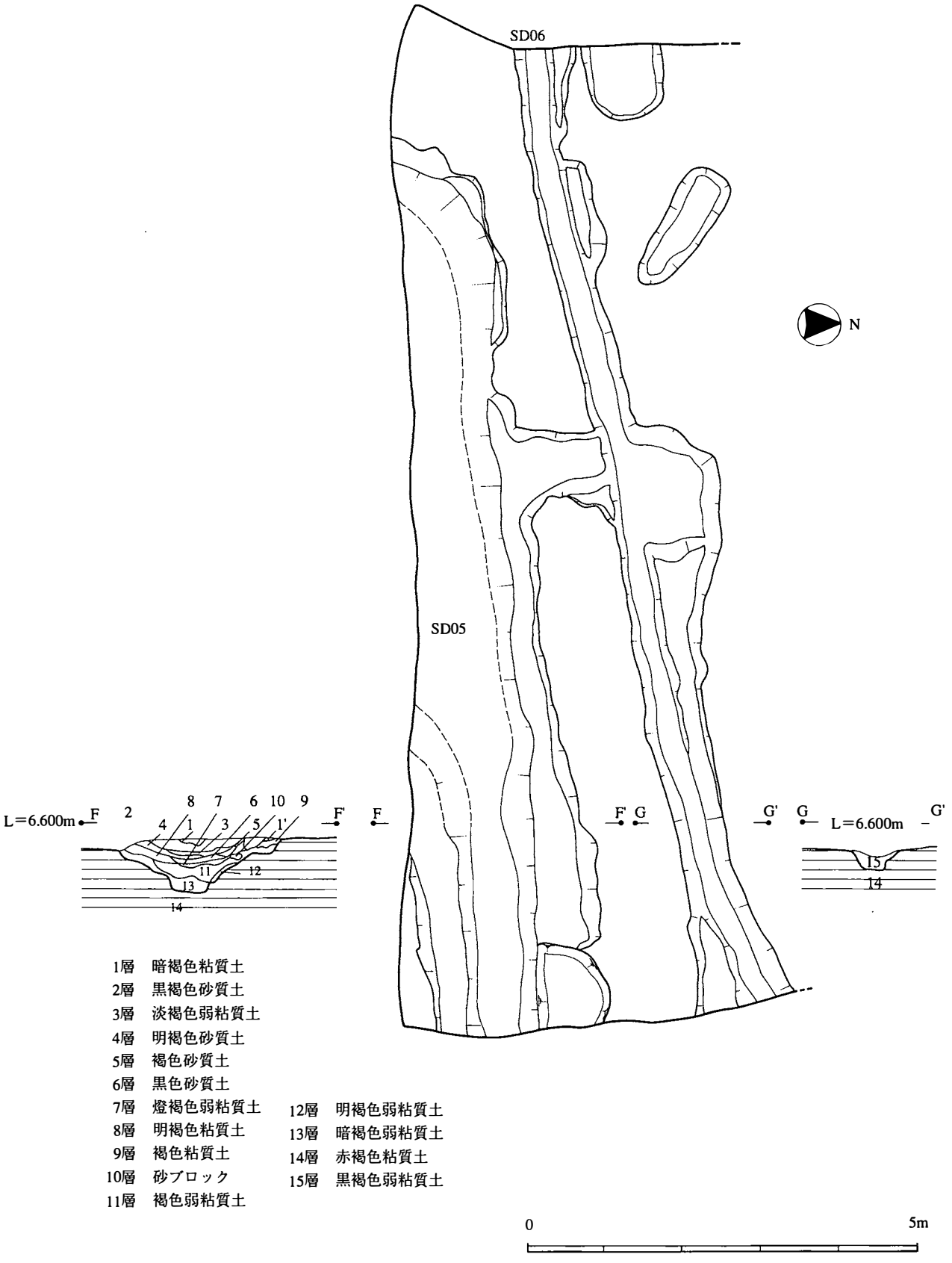
SD07の約0.7m南に、ほぼ平行して存在する。断面形は方形を呈し、幅40cm、深さ20cmを測るが、上部は削平されている可能性がある。

SP01・SP03

14層上面に存在する直径20～40cm、深さ20～30cm大のピットである。人為的なものの可能性は低い。埋土に遺物を含むため、整理の都合上、番号のみを付している。

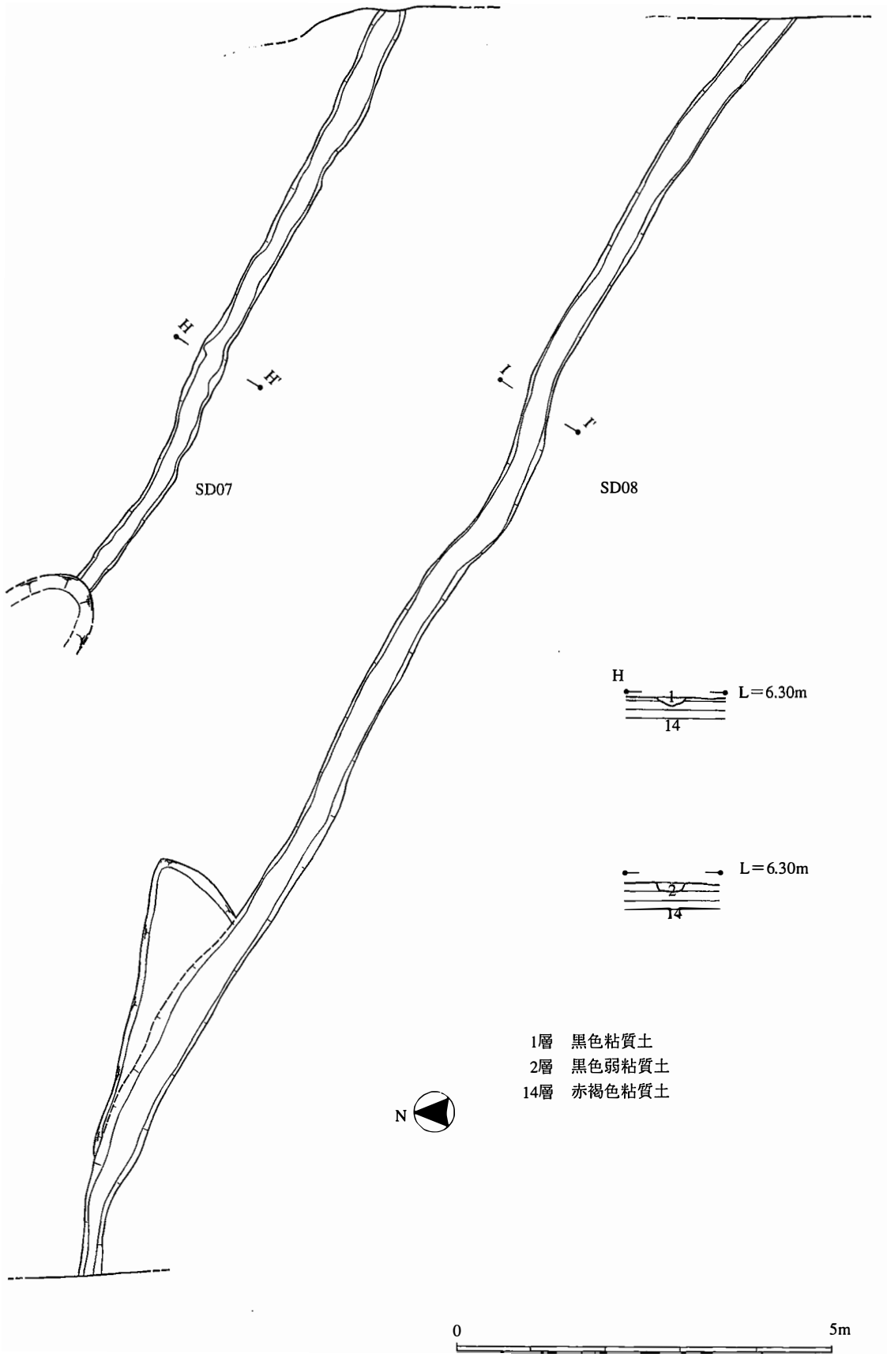


第 5 図　調査区内ベルト土層断面図



1層　暗褐色粘質土
2層　黒褐色砂質土
3層　淡褐色弱粘質土
4層　明褐色砂質土
5層　褐色砂質土
6層　黒色砂質土
7層　燈褐色弱粘質土
8層　明褐色粘質土
9層　褐色粘質土
10層　砂ブロック
11層　褐色弱粘質土
12層　明褐色弱粘質土
13層　暗褐色弱粘質土
14層　赤褐色粘質土
15層　黒褐色弱粘質土

第6図　遺構実測図（SD04・05・06）



第7図　遺構実測図（SD 07・08）

3　遺物

(1)遺構出土の遺物（第 8 図）

それぞれの遺構埋土からの出土遺物である。出土状況から、各遺構の時期を示しているとは言いがたいが、時期決定の目安にするために、遺物の大まかな特徴を述べる。それぞれの細かい特徴は、巻末の遺物観察表に示している。

1　SD04・05出土遺物（１～18）

１～10は弥生土器である。１～３は脚台付き甕の脚台部である。１は、内面はナデ調整である。外面は、ナデにみえるが、残存部が少なく、詳細は不明である。２、３は外面にハケ目を残し、内面はナデ調整である。形態は、１の脚台は外側にむけてひろがり、あまり反らないものである。２、３は１に比べて、脚部が、一度下方にのびる。そこから、内側から外側に向かって、強く反る形態であろう。４は、直口縁の鉢形土器である。４は、外面にハケ目の痕跡が残る。内面はナデ調整である。胴部の中位から口縁部にむかい、角度が直方向に近く立ちあがり、器壁は薄くなりながら、端部を鋭く仕上げる。

５～９は、甕形土器の口縁部と考えられるものを一括した。５は、頸部から口縁部にむけてゆるやかに外反し、端部を軽く面取りする。ハケ調整である。６，７は外側への外反の度合いがやや強く、６の方は、若干外湾する。調整は、ともにハケ目である。７は、口縁端部を面取りする。８，９は、外反した口縁部の端部をつまみ上げ風に仕上げる。９は、端部の外側にも引き出す意識がある。調整は、残存部に関しては、８，９ともに横ナデである。

10は、短頸で素口縁の壺形土器である。口縁部は、やや外反気味に直立する。内外面とも横ナデである。

11は、東播系須恵器と考えている。外面には、格子目状のタタキが残る。

12～14は、底部に糸切り痕を残す土師器杯である。法量は、12が他の２点よりひとまわり小さい。15は、高台付きの土師器である。

16，17は青磁椀である。16は、しっかりとした連弁の形を刻むものである。17は、外面の文様が櫛目文の同じく青磁椀である。

2　SD02出土遺物（18）

縄文晩期の鉢形土器である。内外面ともにミガキで仕上げる。

3　SD08出土遺物（19）

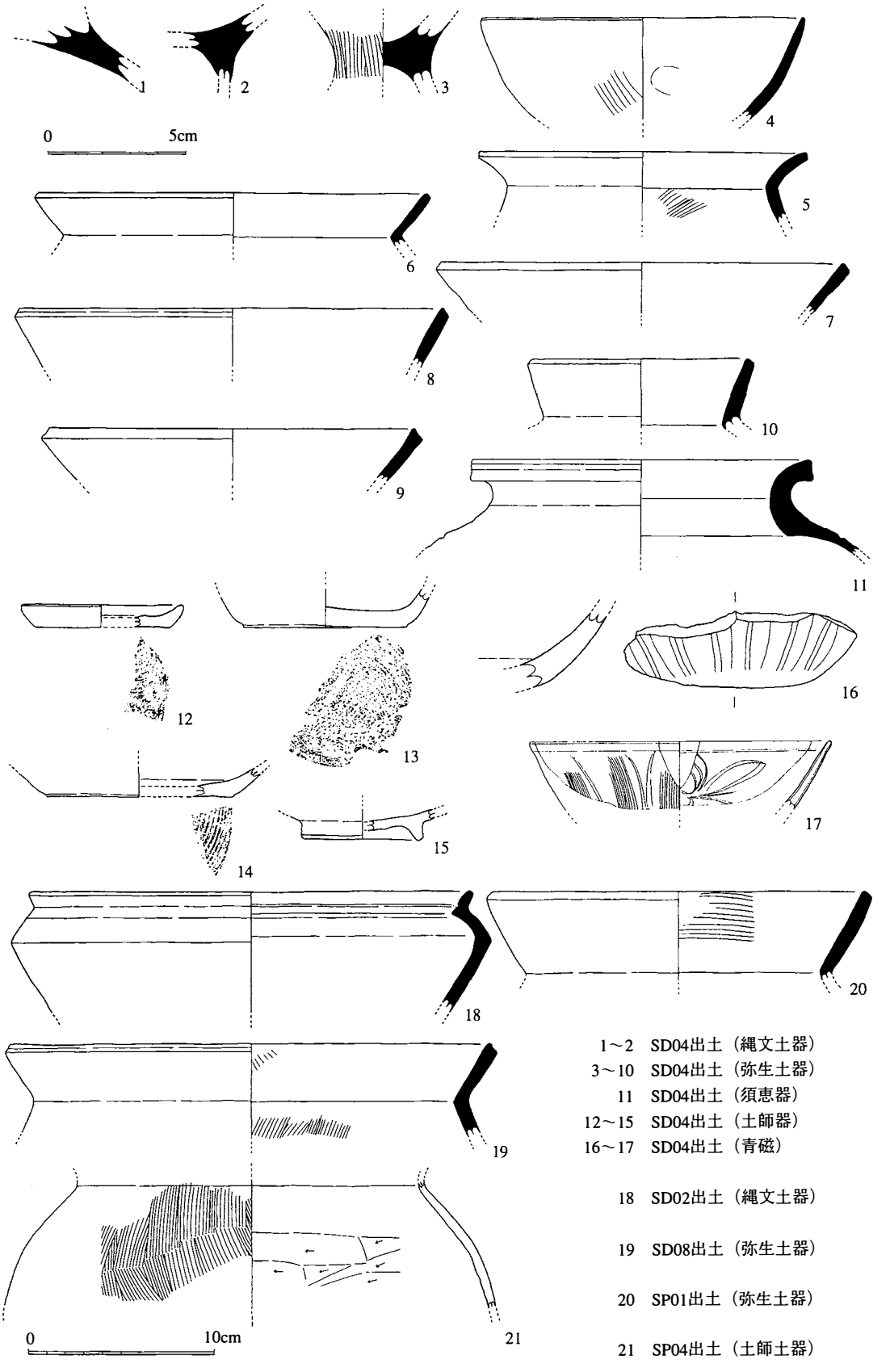
内面にハケ目調整痕が残る弥生土器の甕形土器である。

4　ピット出土遺物（20，21）

20はSP01出土から出土の、弥生土器の甕の口縁部、21はSP04出土の、内面をケズリで仕上げる土師器である。

(2)　包含層出土の遺物（第9図～第20図）

以下、包含層出土の遺物を説明する。包含層は、12層，13層の２層が存在したため、それぞれ別に説明をおこなう。



1～2　SD04出土（縄文土器）
3～10　SD04出土（弥生土器）
11　SD04出土（須恵器）
12～15　SD04出土（土師器）
16～17　SD04出土（青磁）

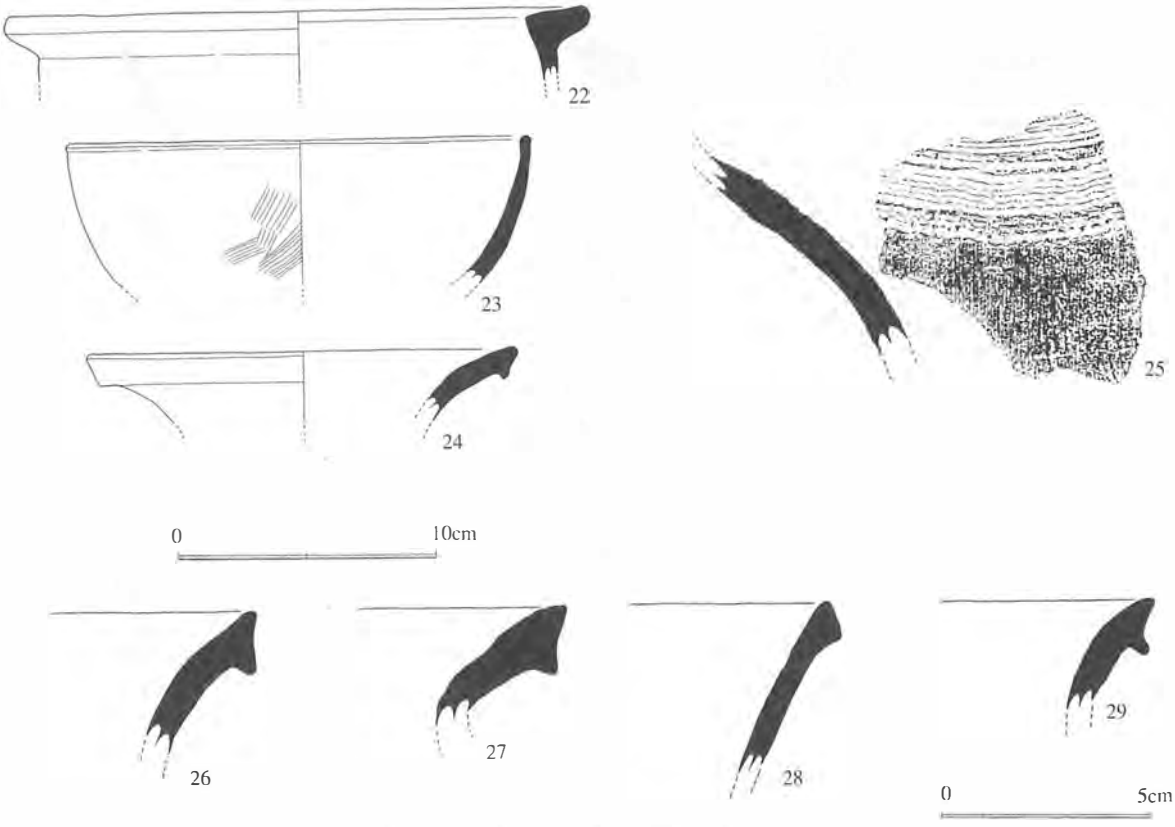
18　SD02出土（縄文土器）

19　SD08出土（弥生土器）

20　SP01出土（弥生土器）

21　SP04出土（土師土器）

第8図　遺構出土遺物実測図



第９図　13層出土遺物実測図（弥生土器）

1　13層出土遺物（第９図～第14図）

包含層出土の遺物を一括した。

13層出土遺物（第９図）

22～27は、全て弥生土器である。中期から後期までと、時期的には、かなりのばらつきがみられる。24は、甕形土器の口縁部である。横ナデ調整を施している。23はボール形の器形の鉢形土器である。外面にハケ目、内面に横ナデの痕跡を残す。24は壷形土器の口縁部である。復元口径は16.8cmを測る。25は壺形土器の胴部破片である。ハケ目のち横ナデで調整した後、櫛描き文様を施す。26～29は、壷形土器の口縁部である。３点とも、残存部は横ナデで仕上げている。

13層出土遺物（第10図～第12図）

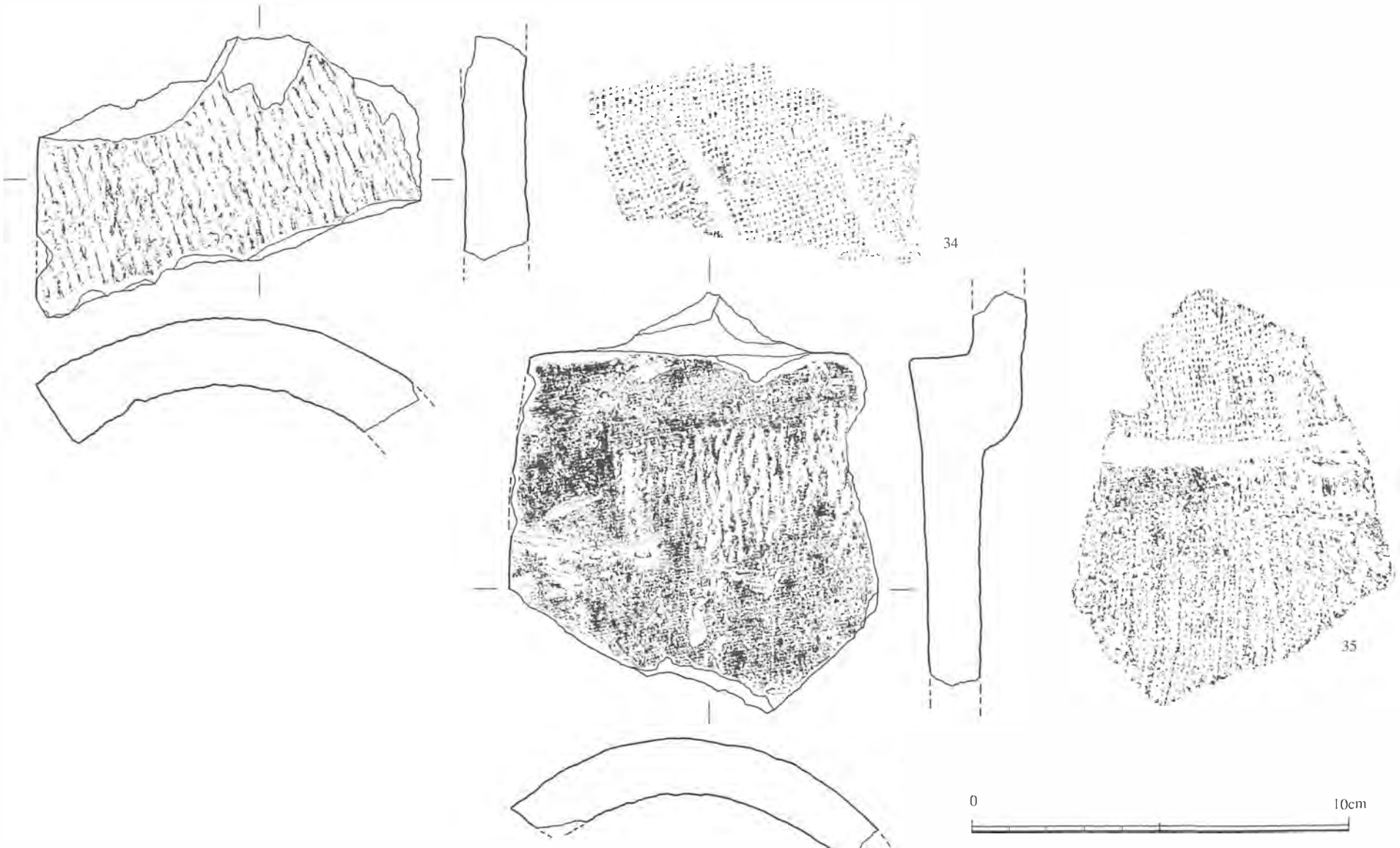
布目瓦である。掲載した点数は９点のみであるが、小破片を含めると、ある程度の固体数が出土している。そのほとんどが、内面に布目圧痕をもち、外面には、縄タタキ痕を観察することができる。なお、当遺跡で出土した瓦は、全て、丸瓦、平瓦である。以下、瓦の種類ごとに、その特徴を述べる。

30～33は丸瓦である（第10図）。30，31は、内面に布目をもち、外面に縄タタキの痕跡を残す。縄目の方向は、同じである。32，33は外面のタタキ痕はなく、無文である。
整形痕をナデ消したと考えられる。33の内面には、瓦整形時の木枠を固定していた紐の結び目が残る。縦方向の紐の間隔は3cm弱であり、整形台の概要を推定できる。。

34，35も丸瓦である。内面に布目痕を残す。外面を縄タタキで整形し、側端部、端部とも、面取りして整形している。

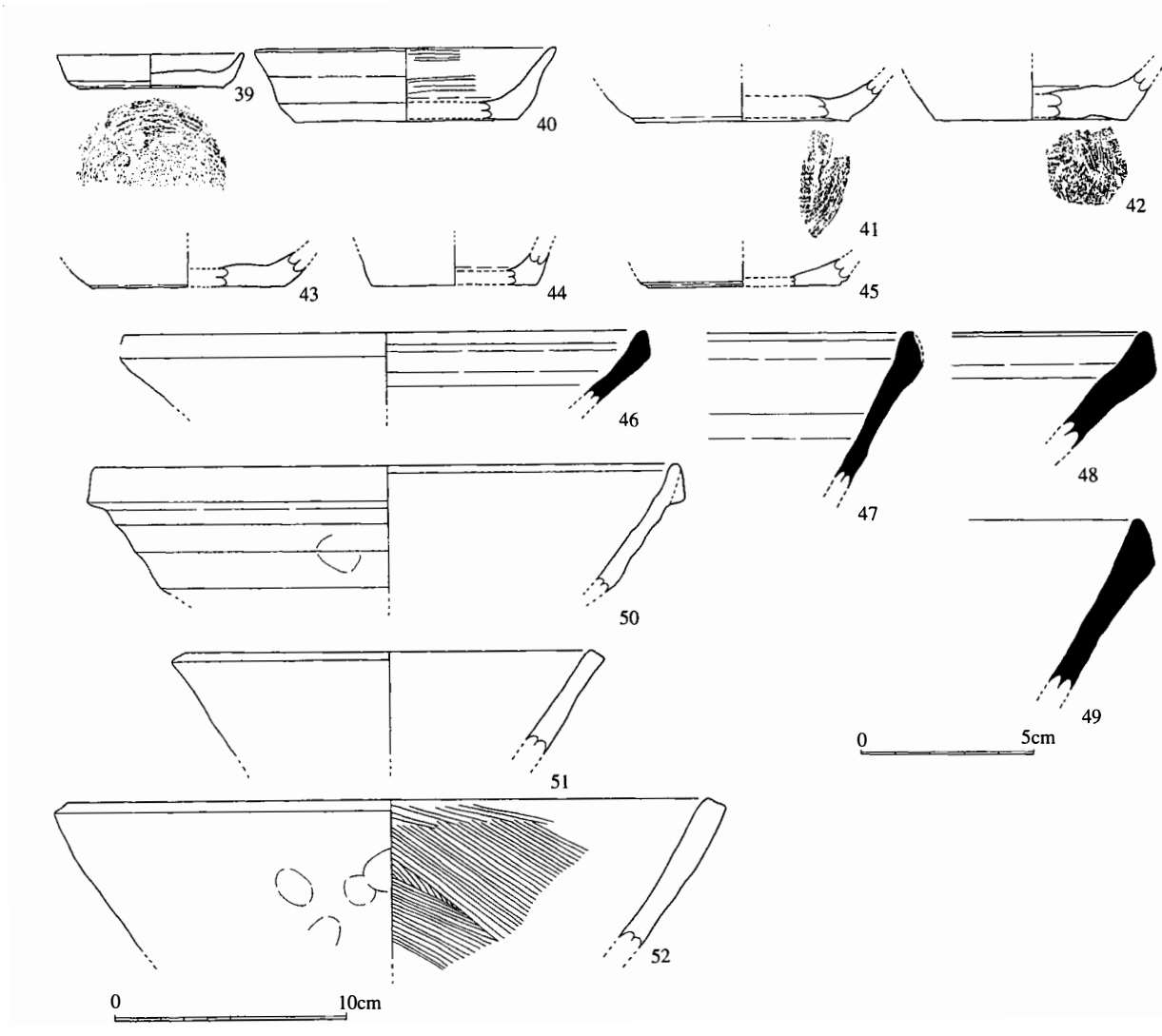
36・38は平瓦である。内面に圧痕を残す。外面は、やや太めの縄タタキ痕が残る。

第10図　13層出土遺物実測図（丸瓦）



第11図　13層出土遺物実測図（丸瓦）

第12図　13層出土遺物実測図（平瓦）



第13図　13層出土遺物実測図（土師器、須恵器、瓦質土器）

13層出土遺物（第13図）

土師器、須恵器、瓦質土器を一括した。

39～45は、底部を糸切り技法で切り離す土師器の小皿、杯であり、回転台を使用して整形をおこなう。39は小皿である。復元口径は8.0cm、残存高1.4cmを測る。40は回転ナデの痕跡を残す。復元底径7.2cmを測る。

41～45は、破片による推定復元径であるが、底径が8.2cm～8.4cmと近い値を示す。44は、立ち上がりの角度が他のものと比べてやや急である。

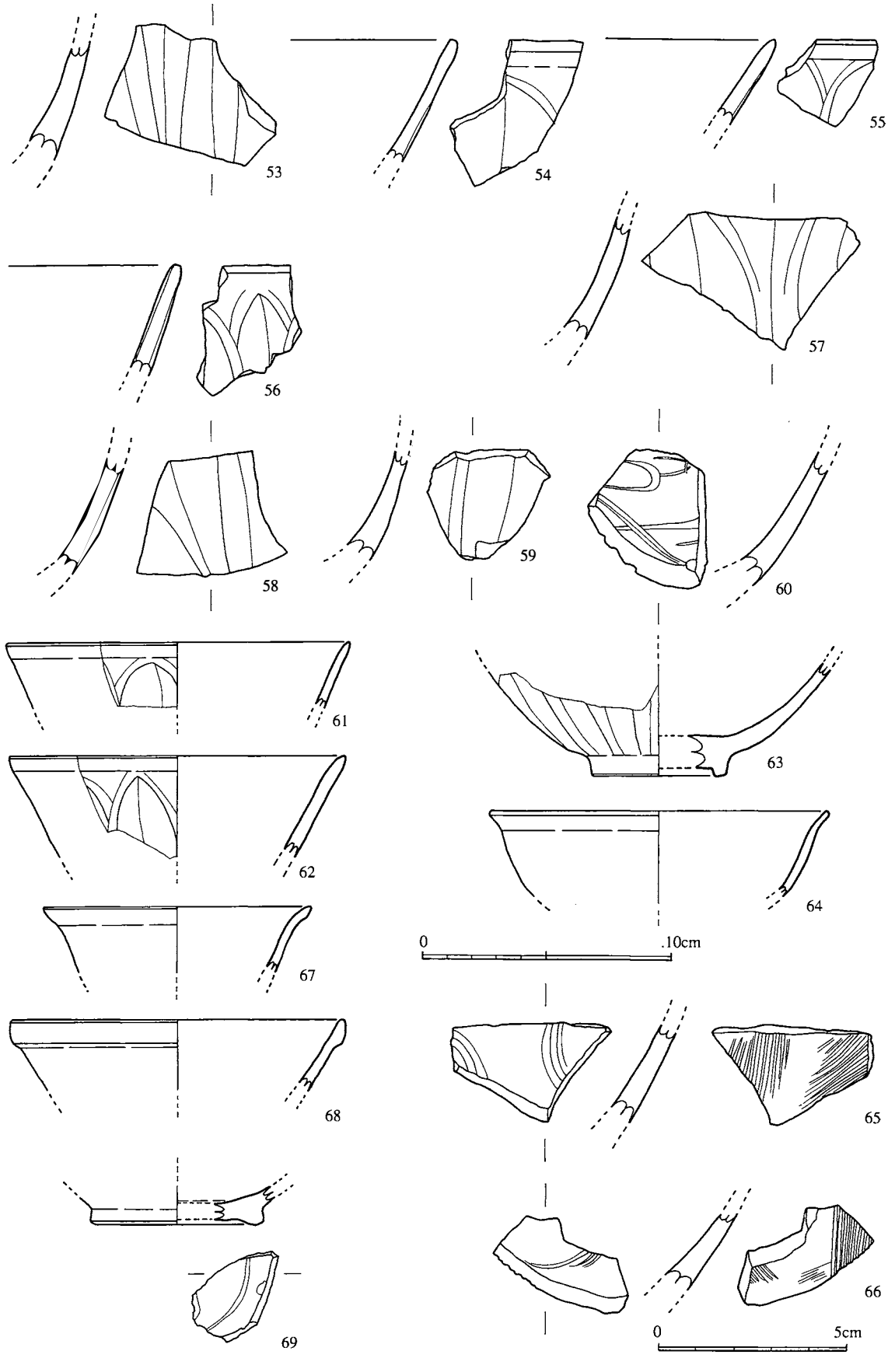
46・49は、須恵器の鉢である。外方向へ向かって、やや急な角度で開き、口縁端部を若干肥厚させる。内・外面に自然釉がかかる。

50・52は、瓦質土器である。全て破片からの復元図であり、ほとんど詳細は分からない。50は、胴部からほぼ直線的に広がる器形で、端部を面トリした口縁部をもつ。51は、口縁部を断面三角形状に肥厚させる。52は、やや丸みを帯びて広がるボール形の器形である。内面には、ハケ状工具を使用する。

13層出土遺物（第14図）

龍泉窯系青磁と、白磁等の陶磁器類である。

53～63は、外面の蓮弁文をヘラによって刻みこむ青磁椀である。蓮弁の形は写実的で、器形は、直線的に



第14図　13層出土遺物実測図（青磁、白磁）

立ち上がるもの（54、61、62）と、丸みをおびた体部のもの（63）との２種に大まかに分かれ、口縁部が残存するものについては、その形態で２種に分かれる。体部からのびてきて端部をとがらすもの（62）と、口縁部を外反させ端部はとがらせずにおさめるもの（56）に分類できる。それぞれの要素の組合せにより、さらに、分類できると思われるが、小破片が多く、各々、観察できる項目が異なるため、これ以上の分類は避けたい63は、見込み部、高台の付け根の釉が厚く、高台部の釉をかきとる。64は外面の文様が分かる部分は残っていない。

60も龍泉窯系青磁である。内面に劃花文をもつ。65、66は青磁の胴部片で、内・外面に櫛歯状の文様をもつ。

67は白磁椀である。胴部の器形は、直線にやや近く、口縁部を外反させ、端部を軽く面トリする。口縁部の釉をかきとる。復元した口径は、10.6cmを測る。68は、復元口径13.4cmの白磁椀である。直線的に広がる体部に、玉縁状の口縁部をもつ。

69は、白磁の底部である。底部は、無釉である。

２　12層出土の遺物（第15図～第20図）

13層出土遺物と同様に、遺物種別ごとに説明をおこなう。口径、底径等の詳述も、同様に遺物観察表に記載した。

12層出土遺物（第15図）

縄文土器、弥生土器、土師器を掲載した。

70は、リボン状突起をもつ縄文晩期の浅鉢である。内・外面を二枚貝条痕で調整し、内面は、その後、ナデ調整している。71も同じく縄文晩期の浅鉢である。復元口径27.8cmを測る。

72～80は、弥生土器である。72・75は、口縁部資料で、かろうじて反転復元できるものである。74は外反した口縁端部の形態が丸いままでおさまる。73、75の口縁部は、やや内湾ぎみに立ち上がり、端部をつまみ上げ風に仕上げる。

76～80は、弥生土器の口縁部であるが、器形がよく分からないものである。76は面トリしながら、つまみ上げ風に仕上げるもの。77は端部を面トリするものである。78～80も弥生土器の口縁部であるが、小破片のため、ほとんど、全体の状況は分からない。口縁部を肥厚させる形態のもので、79、80は、肥厚した口縁部をやや下方に垂下させている。

81～89は、土師器である。

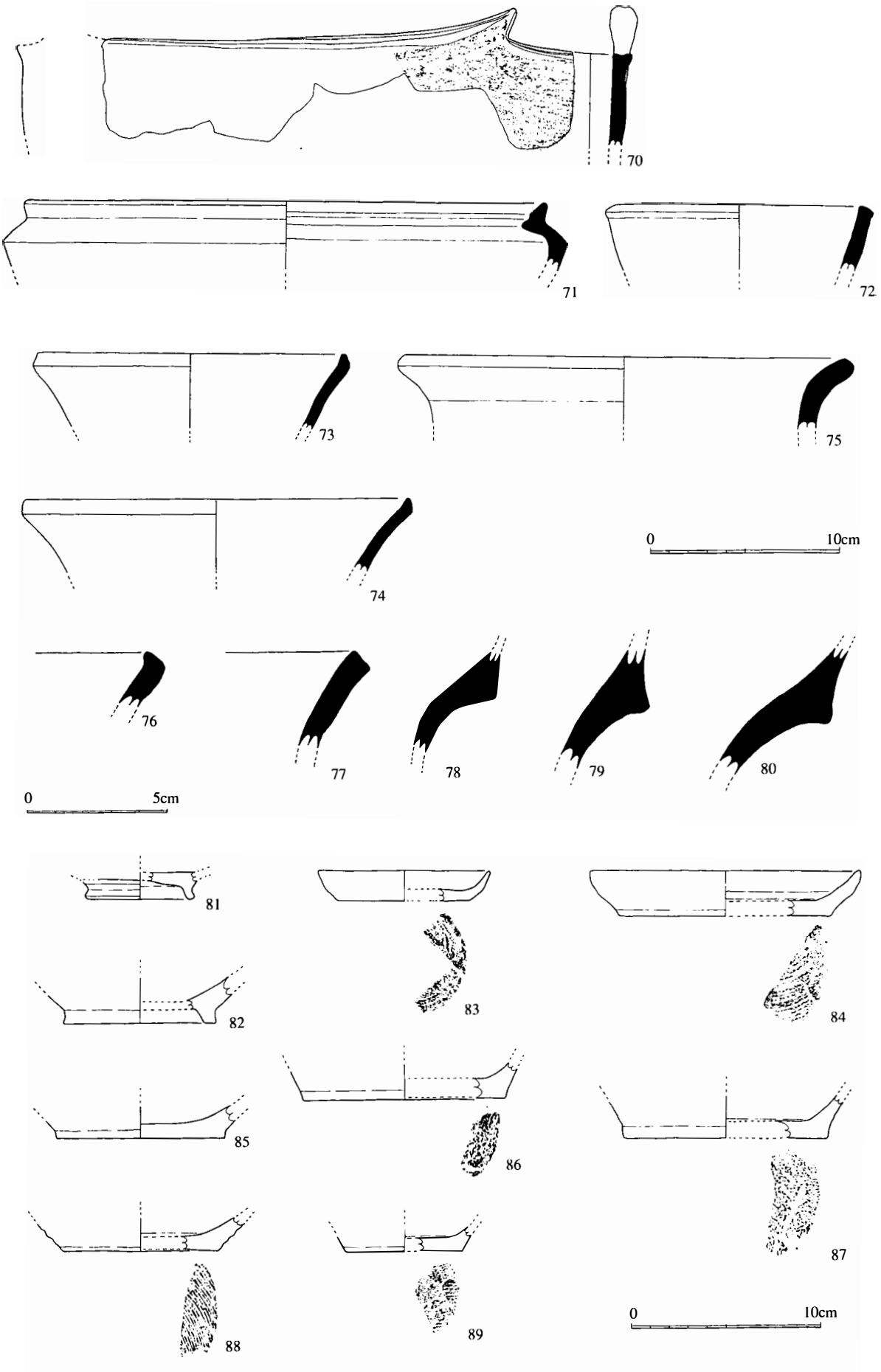
81、82は赤彩を施す高台付きの土師器である。81は、底径約8.0cm、高台高0.7cmの低い貼付高台をもつ。外面に赤彩が残る。82はやや外側に開く高台をもつが、高台の高さは0.6cmと、やはり低い。内・外面に赤彩を施す。

83～89は、底部に糸切り痕をもつ土師器杯である。小破片のからの復元のため、正確には不明であるが、法量は、底径のみから推測すると、10cm前後のものと、それ以内の小型のものの２種類に分かれそうである。

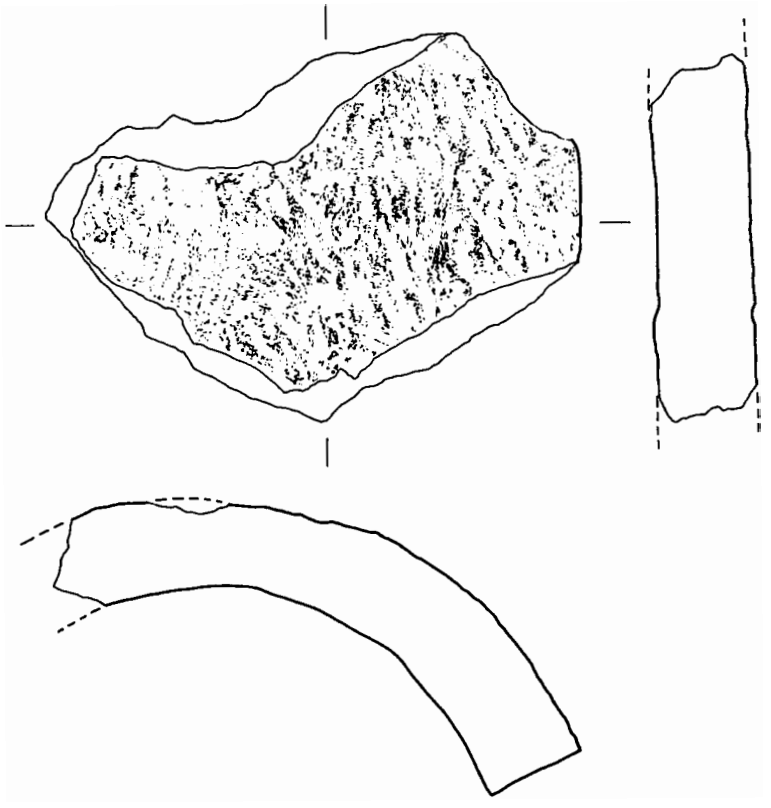
12層出土遺物（第16図～第19図）

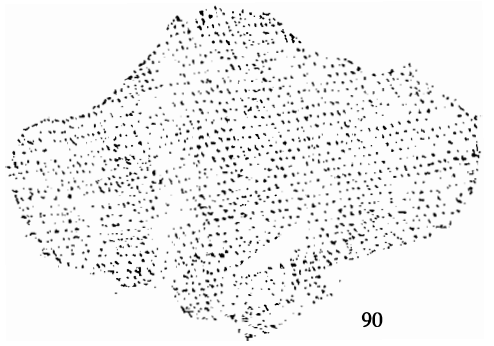
全て、布目圧痕をもつ瓦である。

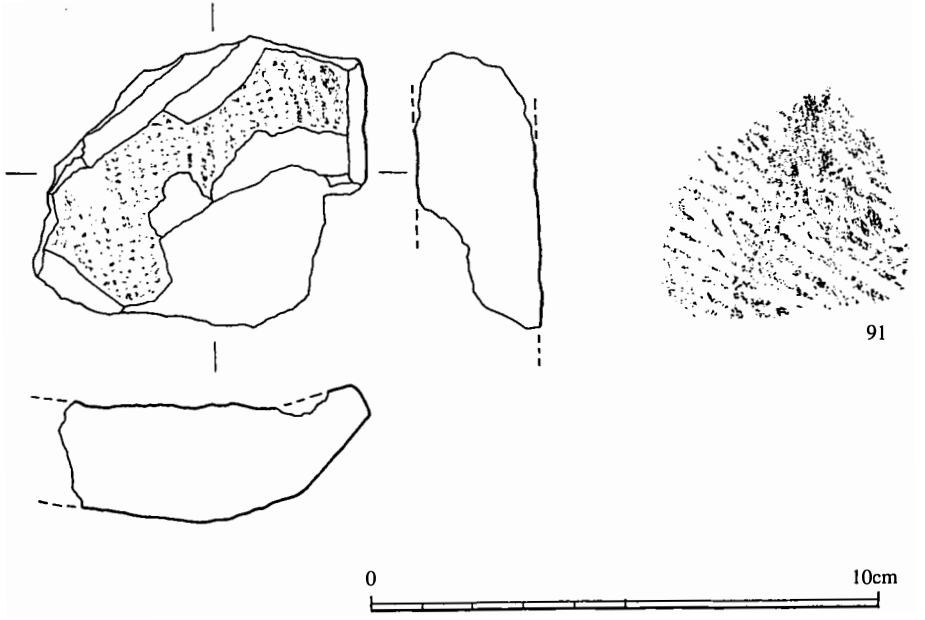
90、91は丸瓦である（第16図）。内面に布目をもち、外面に縄タタキの痕跡を残す。縄目よりは、ともに同じ方向である。



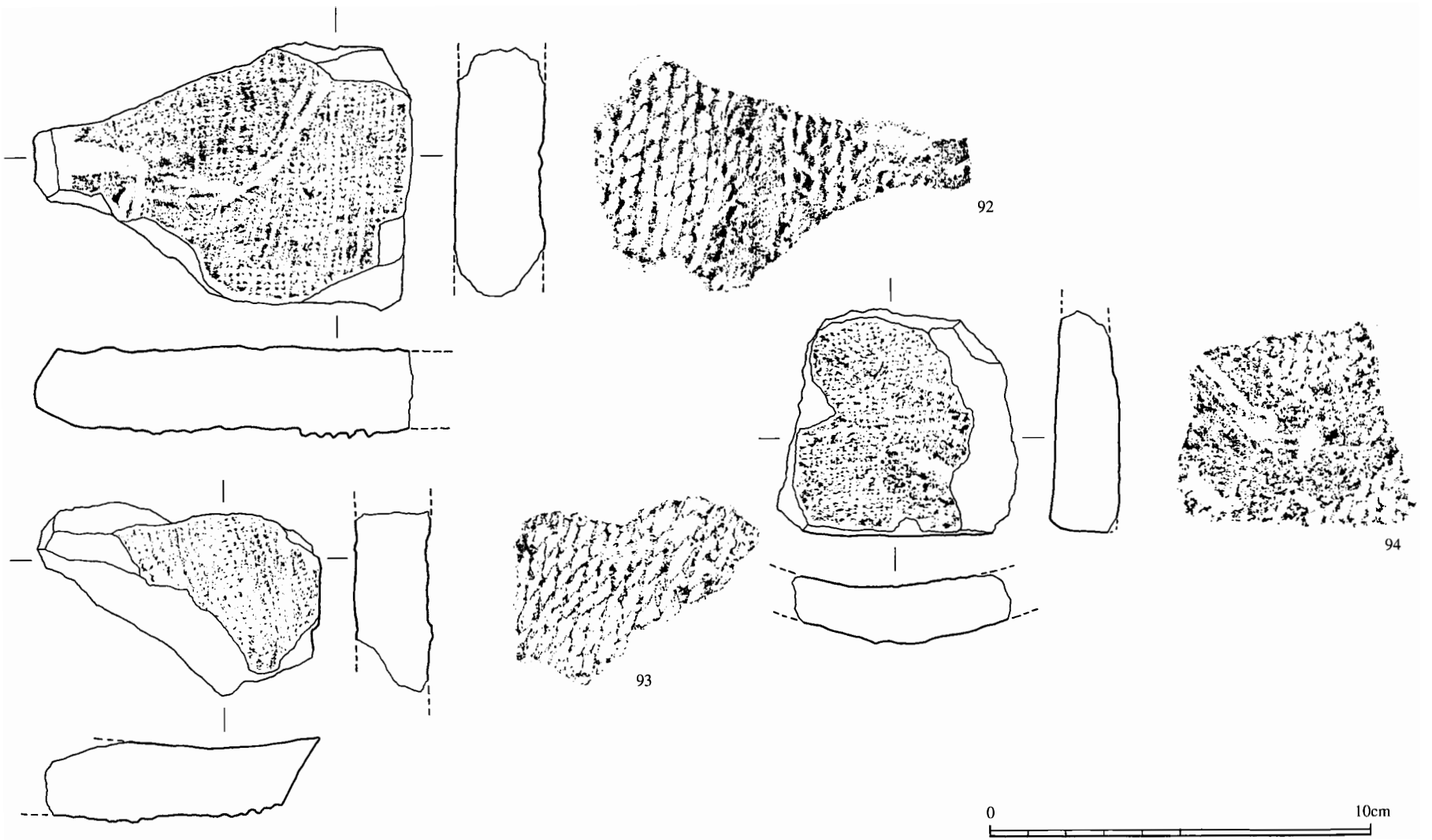
第15図　12層出土遺物実測図（縄文土器・弥生土器・土師器）



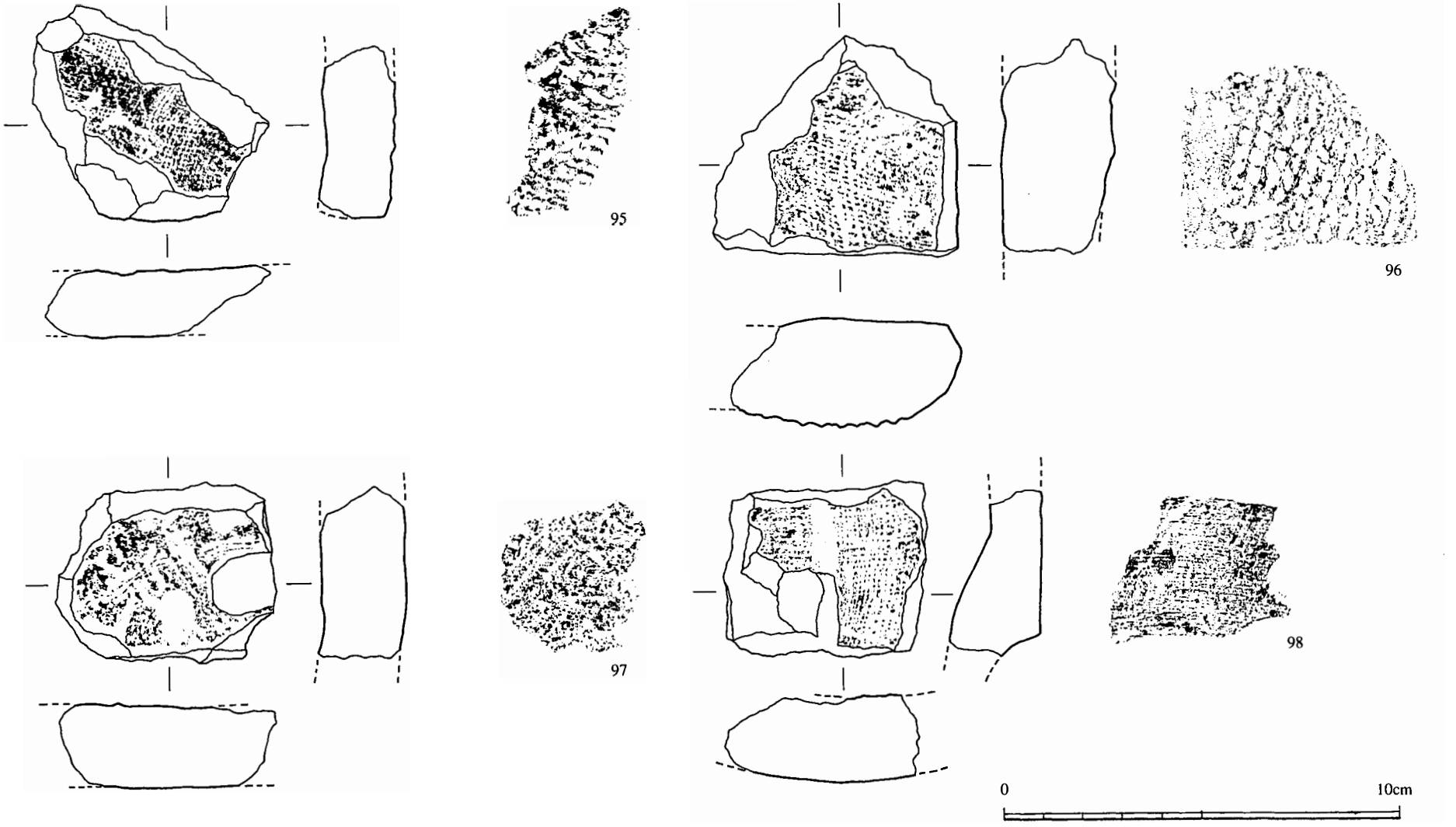




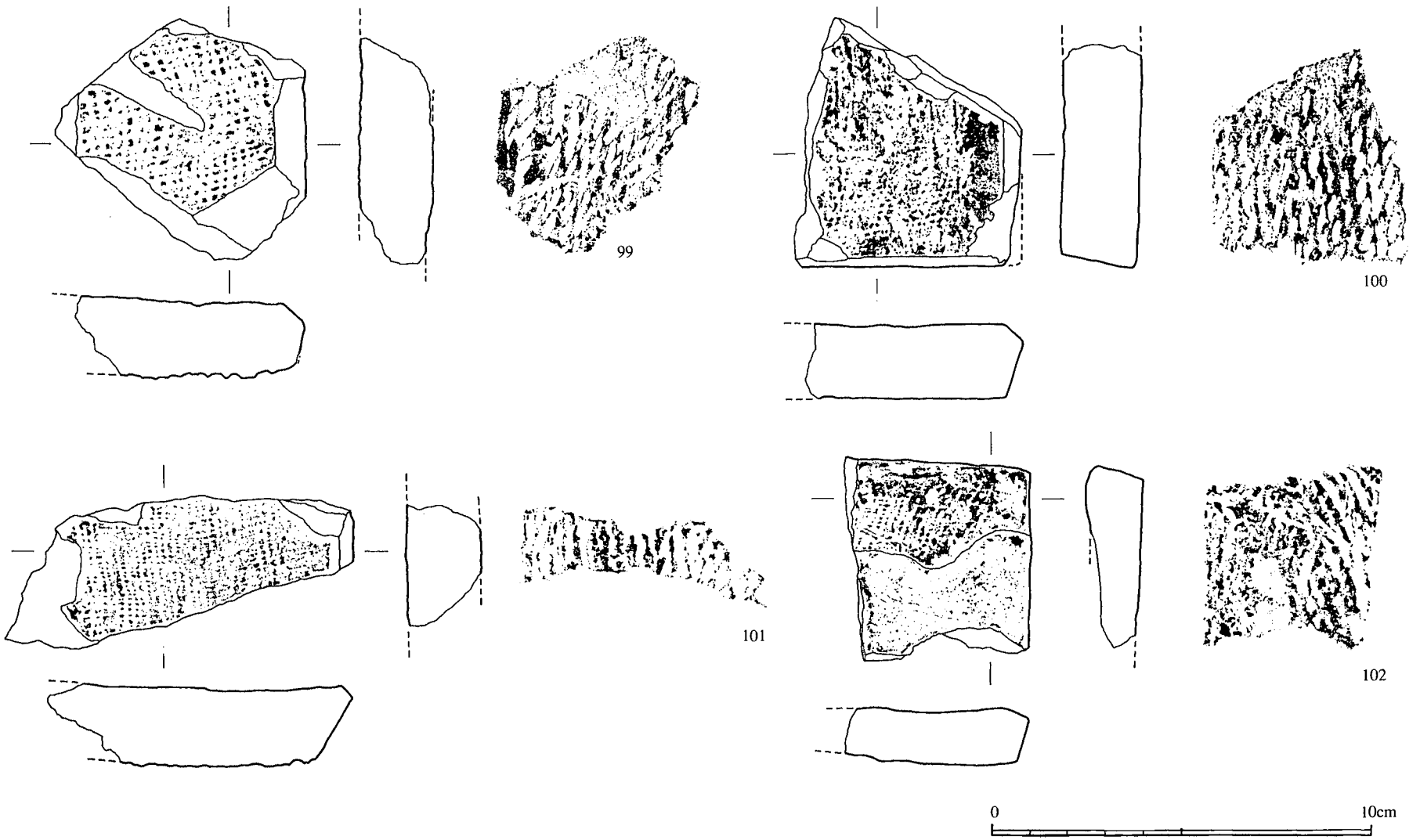
第16図　12層出土遺物実測図（丸瓦）



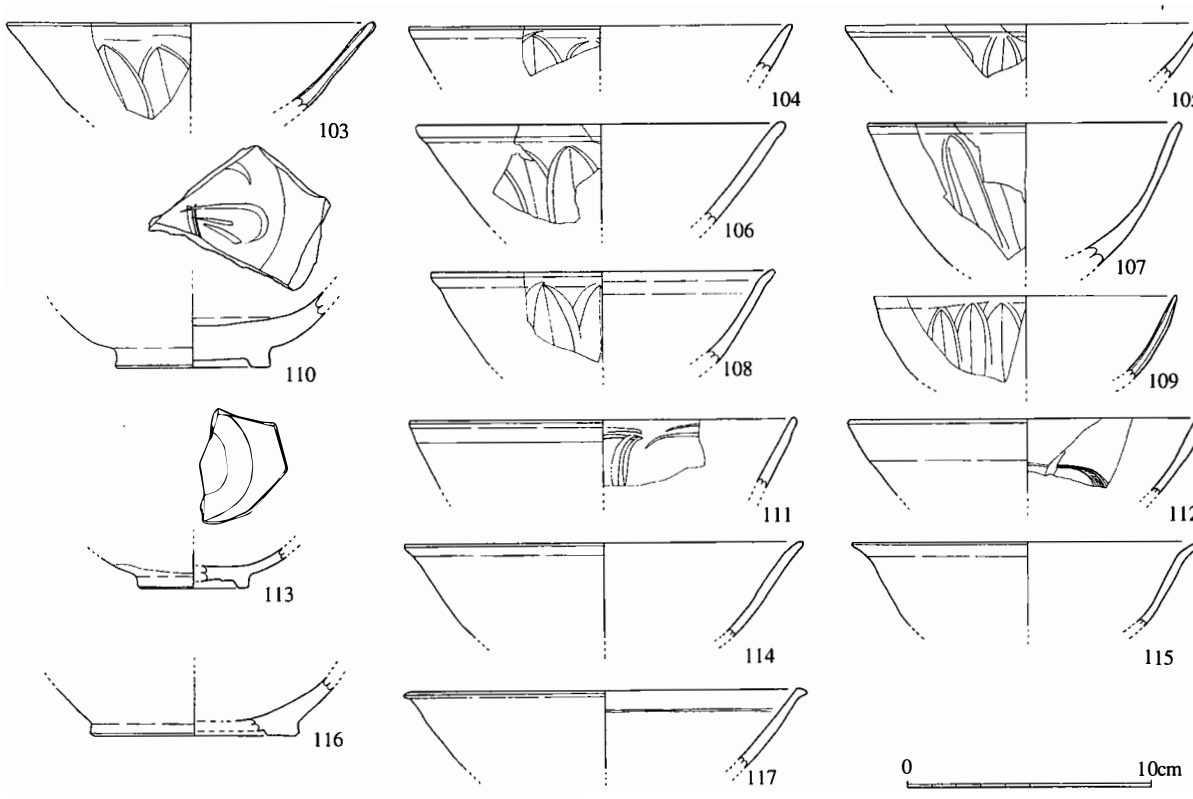
第17図　12層出土遺物実測図（平瓦）



第18図　12層出土遺物実測図（平瓦）



第19図　12層出土遺物実測図（平瓦）



第20図　12層出土遺物実測図（青磁・白磁）

92～94は平瓦である。小破片のため、詳細は不明であるが、整形痕をナデ消したと考えられる資料が存在する。

95～98も平瓦である。内面に布目痕を残す。外面を縄タタキで整形し、側端部、端部を面取りして整形する。

99～102は平瓦である。内面に布目圧痕を残す。外面は縄タタキ痕が残る。小片のため、端部の調整や、形態などの詳細は不明である。

12層出土遺物（第20図）

12層から出土した龍泉窯系青磁と、白磁、近世陶磁器を一括した。図化に耐えうる15点のみを掲載した。

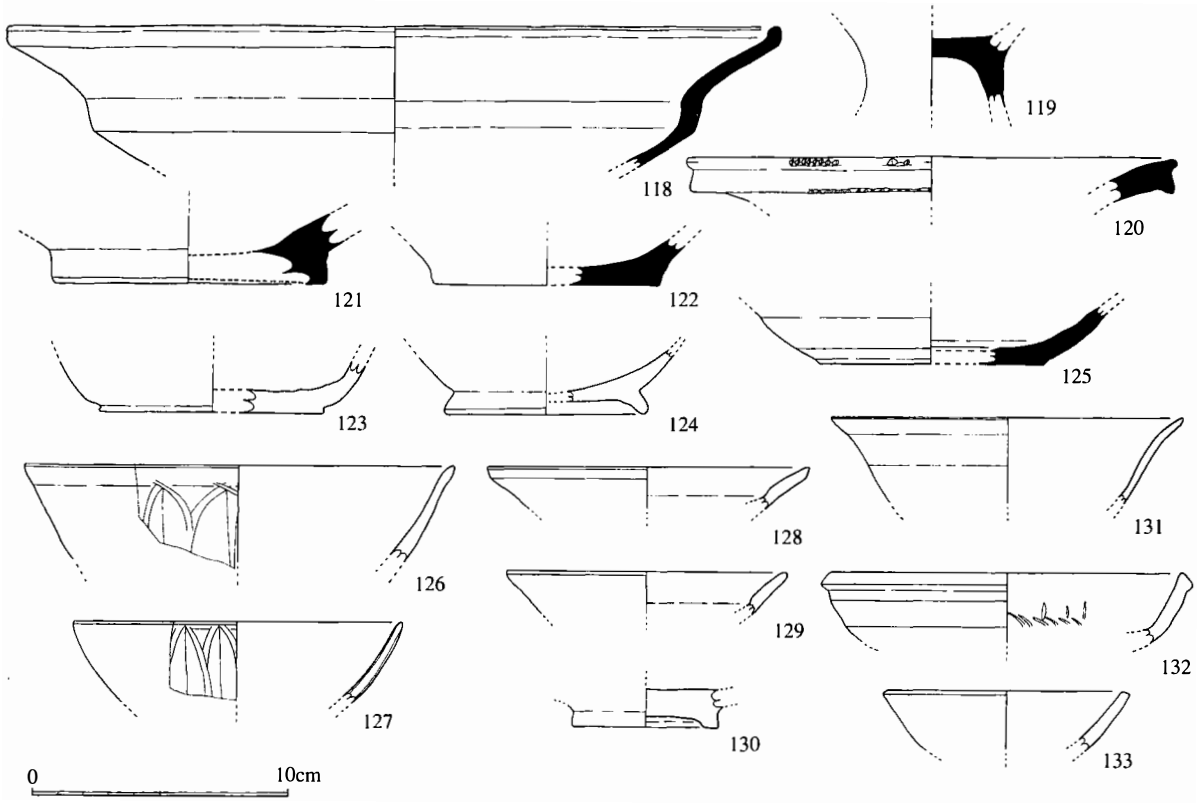
103～109は、外面に写実的な蓮弁文を刻みこむ青磁椀である。器形は、直線的にひろがるもの（103、106）と、丸みをおびた体部のもの（109）との２種に大まかに分かれ、口縁部形態でも、２種に分かれる。体部からのびてきて端部をとがらすもの（105）と、口縁部を外反させ端部はとがらせずにおさめるもの（108）である。それぞれの要素の組合せにより、さらに、分類できると思われる。また、それらの要素の相関関係をみることもできる。

110は、見込み部、高台の付け根の釉が厚い。

111、112は、青磁の胴部片である。

113は龍泉窯系青磁の底部である。底径は6.4cmを測る。高台部の釉をかきとっている。

114～117は白磁椀である。114は、胴部の器形が直線的で、端部を軽く面トリする。115は、やや外反させた口縁部内面の釉をかきとる資料である。116は釉が観察できない白磁の底部である。小破片のため、詳しくは分からない。117は、復元口径16.6cmの白磁椀である。直線的に広がる体部に、玉縁状の口縁部をもつ。



第21図　その他の遺物

その他の遺物（第21図）

包含層から出土した遺物の中で、層位が不明確なものや、撹乱から出土したものである。包含層の時期の下限に影響を与えそうな資料も存在するため、掲載した。

118は、縄文土器の浅鉢である。

119～122は、弥生土器の脚台部分と、口縁部である。119は外面にハケ目、内面にはナデ調整を観察することができる。

123・124は土師器杯である。高台付きのもの（124）は、丸みを帯びた体部から底部に、外側に広がり気味の高台をつけた形態である。黒色土器A類である。

125は瓦質土器の底部である。

126～130は、龍泉窯系青磁椀である。蓮弁のかたちはしっかりしている。

131～133は、近世陶磁器である。それぞれ、器形、時期などが異なる。

第Ⅳ章　まとめ

第１節 遺構について

今回の調査区からは、時期が明確な遺構は検出されなかった。最下層において溝状遺構と、ピットが検出されたのみである。遺構内出土の遺物も、時間的にかなり幅をもち、その上層の包含層出土の遺物も同様である。遺物の残存状況も悪く、当調査区周辺において使用されていたと断言することはできない。

包含層は、12層と13層の２層がある。各層とも遺物包含層であり、どちらも、縄文時代から中世までの遺物を含む。12層と13層の間は、遺構が全くみられないため、生活面として一時期が存在したとは考えられない。上層である12層は、近世陶磁器片を含むため、これが、時期推定の下限資料となる。非常にあいまいな時期決定であるが、この２層の包含層の下限をもってして、当遺跡の埋没時期の下限年代としたい。なお、第Ⅲ章で述べた様に、当調査区に、かつて水田が存在したのではないかと考えた。その根拠と、問題点については、前述したので繰り返さないが、遺跡土壌における鉄分の集積状況、付編としたプラントオパール分析の結果等から、当調査区が、ある時期、水田であった可能性を指摘しておきたい。考古学的に、調査時に、畦畔を検出することができなかったため、可能性とすることしかできないが、14層において検出した溝状遺構も、区画等の、水田に関連するなんらかの遺構であったと考える。検出したピット群は、遺構の可能性が低いと考えたい。畦畔を検出することができなかった点については、遺物の残存状況等からして、洪水等により、耕作土が流出したか、調査区内では検出できないほどの大区画の新しい水田であった可能性を考えている。

第２節 遺物について

上記の様な遺跡の状況であるので、遺物についても、一括性にとぼしい資料と言わざるを得ない。遺跡の状況を考えると、遺構内の遺物、及び遺物包含層の遺物をそれぞれ分けて評価する必要性は低く、遺跡全体の下限を推定するに留めたい。

遺物は、縄文晩期のものから弥生中期、後期と続く。遺構内の遺物や、下層である13層出土の遺物では、弥生後期の土器が最も多く、遺跡における、ある有力な一時期と考えたいが、調査成果から、その根拠を見出すことはできなかった。それ以降は、古代をはじめとして、中世、近世の遺物が混在する状況であるため、各々の遺物についての説明は避け、巻末の観察表によることとしたい。

古代、中世の須恵器、土師器の時期決定に関して、その製作技法の他に、器形、法量が大きな意味を持つ。図面上、復原して実測したものが多いが、遺物の残存度は低く、ローリングをうけて摩滅しているものも多かったため、法量から時期の推定や、傾向について言及することはほとんど不可能である。杯や小皿の底部切り離し技法等から、ある程度の推定は可能であるが、逆に非常に時間幅のひろい資料であることが言えるのみである。須恵器に関しては、東播系須恵器が１点、出土しているのが注目される。

瓦は、小破片が多いが、ほとんどが、古代の布目瓦である。丸瓦、平瓦、両方の資料が混在するが、内面に布目圧痕が残り、外面を縄タタキで整形しているものがほとんどである。ただし、瓦の形式等が分かる資料は、ほとんど存在しない。ある程度の量の布目瓦が出土したこと自体が、重要であると考えたい。

陶磁器類も、ある一定の個体数が出土している。しかしながら、例に漏れず、小破片がほとんどである。

掲載した実測図も、反転復原したものがほとんどであることをお断りしておきたい。龍泉窯系青磁椀が一定数、出土している。外面の連弁文が写実的なものが多く、やや古い様相を示すが、直線的に刻んだものまでが存在し、土師器、須恵器と同様、包含層が時間幅を持つということしか述べることができない。近世陶磁器が、若干数、出土している。16～17世紀台の所産と考えている。

参考文献

平野流香　1931『熊本市史』熊本市

乙益重隆　1965「飽田国府」『熊本県史　総説編』熊本県

松本雅明　1975「飽田国府」『熊本市南部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会

木下　良　1975「肥後国府の変遷について」『古代文化　9』古代学協会

網田龍生　1994「奈良時代　肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会

美濃口雅朗1994「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究　X』日本中世土器研究会

網田龍生　1994「回転台土師器の成立と展開」中近世土器の基礎研究　X』日本中世土器研究会

美濃口雅朗1996「飽田国府」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗1996「二本木遺跡群（古町小学校付近の出土遺物）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗1996「二本木遺跡群（春日町遺跡）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗1996「二本木遺跡群（第１次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗1996「二本木遺跡群（第２次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗・竹田宏司1996「二本木遺跡群（第３次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗・竹田宏司1996「二本木遺跡群（第４次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗1996「二本木遺跡群（第５次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗・竹田宏司1996「二本木遺跡群（第６次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

赤星雄一1996「二本木遺跡群（第７次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗1996「二本木遺跡群（第８次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

竹田宏司1996「二本木遺跡群（第９次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

赤星雄一1996「二本木遺跡群（第10次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗1996「二本木遺跡群（第11次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

美濃口雅朗・竹田宏司1996「二本木遺跡群（田崎本町遺跡第１次調査区）」『新熊本市史　史料編　第１巻　考古史料』熊本市

大城康雄1996「二本木遺跡群（田崎本町遺跡第２次調査区）」『新熊本市史　史料編　考古史料』熊本市

岩本政教ほか1964『熊本県の地理』

第2表　遺物観察表（1）

縄文土器観察表

図版番号	遺物番号	グリッド	層位	遺構	器種	部位	口径	現存高	器厚	底径	外面	内面	外面	内面	胎土混入物	焼成	備考
第８図	1	A-2	一括	SD-04		脚部		2.5			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	微細な石英	良好	
第８図	18	D-2	XIII	ＳＤ-02	深鉢	口縁部	23.8	6.4			にぶい褐色	にぶい褐色･褐灰色	ミガキ	ミガキ	微細な角閃石	良好	
第15図	70	C-2	一括	包含層	深鉢	口縁部	32.6	4.8	1.4		にぶい赤褐色	明赤褐色	ナデ･二枚貝条痕	ナデ･条痕後ナデ	砂粒･長石	良好	
第15図	71	D-2	一括	包含層	浅鉢	口縁部	27.8	2.5	1.2		にぶい赤褐色?灰褐色	褐色	ナデ	ナデ	微砂粒･角閃石･長石	良好	
第21図	118	C-2･北	一括	包含層	浅鉢	口縁部	30.2	5.4	0.7		褐灰色･にぶい黄褐色	灰黄褐色	ミガキ	ミガキ	微細な雲母･角閃石･石英	良好	

弥生土器観察表

図版番号	遺物番号	グリッド	層位	遺構	器種	部位	口径	現存高	器厚	底径	外面	内面	外面	内面	胎土混入物	焼成	備考
第８図	2	A-2	一括	SD-04		脚部		2.4			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	微砂粒･角閃石	良好	
第８図	3	A-3	一括	SD-04･05		脚部		3.2			灰黄褐色	にぶい黄橙色	ハケ目	ナデ	微細な石英･角閃石	良好	
第８図	4	A-2	一括	SD-04	碗	口縁部	17.2	5.4			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ･指頭圧痕	ヨコナデ･ハケ目後ヨコナデ	微細な雲母･角閃石	良好	
第８図	5	A-2	一括	SD-04	甕	口縁部	17.6	3.7			にぶい黄橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ･ハケ目後ナデ	微細な角閃石	良好	
第８図	6	A-2	一括	SD-04		口縁部	13.2	2.7			にぶい黄橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	微細な石英･角閃石	良好	
第８図	7	A-2	一括	SD-04		口縁部	22.0	2.7			にぶい橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ハケ目後ヨコナデ	微細な石英	良好	
第８図	8	A-2	一括	SD-04		口縁部	23.4	3.1			にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	微細な石英･角閃石	良好	
第８図	9	A-2	一括	SD-04		口縁部	20.4	2.8			にぶい黄橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	微細な角閃石	良好	
第８図	10	A-2	一括	SD-04	壷	口縁部	12.0	3.7			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	微細な角閃石	良好	
第８図	19	C-2	一括	SD-08	甕	口縁部	26.4	5.0			にぶい黄橙色	黄褐色	ヨコナデ	ハケ目後ヨコナデ	微砂粒･石英･雲母	良好	口唇部に沈線
第８図	20	B-2	一括	P-1	壷	口縁部	20.4	4.7			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ハケ目後ヨコナデ	微細な雲母･角閃石･微砂粒	良好	
第９図	22	C-2	13	包含層	甕	口縁部	11.4	2.8	0.7		にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	石英	良好	
第９図	23	B-2	一括	P-1	碗	口縁部	18.2	5.6	0.7		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ハケ目後ヨコナデ	雲母･角閃石	良好	
第９図	24	A-2	13	包含層	壷	口縁部	16.8	2.7	1.1		にぶい黄橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	微細な石英･角閃石	良好	
第９図	25	A-2	13	包含層	壷	頚部		4.7	0.7		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ケズリ後ナデ	ハケ目後ヨコナデ	砂粒･角閃石･雲母	良好	
第９図	26	B-1	13	包含層	壷	口縁部		3.7	0.9		にぶい黄橙色	浅黄橙色･褐灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	微細な石英･角閃石	普通	
第９図	27	B-1	13	包含層	壷	口縁部		3.1	1.2		にぶい橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒	良好	
第９図	28	C-2	13	包含層		口縁部		3.9	0.9		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケ目後ナデ	ヨコナデ･ハケ目後ナデ	細かい砂粒	良好	
第９図	29		13	包含層	壷	口縁部		2.6	0.7		黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	石英･角閃石	普通	
第15図	72	C-1	12	包含層	鉢	口縁部	14.0	3.3			にぶい橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒･雲母	良好	
第15図	73	C-2	12	包含層	壷	口縁部	16.7	3.9			橙色?明赤灰色	褐灰色?明褐灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒･赤褐色砂粒･雲母	良好	
第15図	74	D-1	12	包含層	壷	口縁部	24.1	3.6			にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	砂粒･角閃石･赤褐色砂粒	良好	
第15図	75	D-1	12	包含層	壷	口縁部	27.0	3.8			にぶい黄橙色･橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒･角閃石･雲母	良好	
第15図	76	C-1	12	包含層		口縁部		1.9			にぶい橙色	灰白色	ナデ	ハケ目	砂粒･長石･赤褐色砂粒	良好	
第15図	77	D-1	12	包含層		口縁部		3.3			明黄褐色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒･雲母	良好	
第15図	78	C-2	12	包含層	壷	頚部		3.8			浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	砂粒･角閃石･赤褐色砂粒	良好	
第15図	79	C-1	12	包含層	壷	頚部		4.1			にぶい黄橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	微砂粒･角閃石･赤褐色	良好	
第15図	80	C-2	12	包含層	壷	頚部		3.7			橙色?にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ	微砂粒･角閃石･石英	良好	
第21図	119					脚台部					にぶい橙色	にぶい黄橙色			石英、長石	良好	
第21図	120					口縁部					にぶい橙色	にぶい黄橙色			石英、長石	良好	
第21図	121					底部		1.6		10.8	にぶい橙色	にぶい黄橙色	指調整後ヨコナデ･指頭圧痕	ナデ	微砂粒･金雲母･長石	良好	
第21図	122					底部		9.0	1.2	9.0	にぶい橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ナデ	砂粒･長石･角閃石	良好	

第3表　遺物観察表（2）

土師器観察表

図版番号	遺物番号	グリッド	層位	遺構	器種	部位	口径	現存高	器厚	底径	外面	内面	外面	内面	胎土混入物	焼成	備考
第8図	12	A-2	一括	SD-04·05		口縁部	8.8	1.2		7.2	にぶい黄橙色	明褐色	ナデ	ナデ	微砂粒	良好	
第8図	13	A-2	一括	SD-04		底部		2		8.8	にぶい褐色	にぶい褐色	回転ヨコナデ	ヨコナデ	微細な石英	良好	底部外面に糸切痕
第8図	14	A-2	一括	SD-04		底部		1.5		10.0	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	微砂粒	良好	底部外面に糸切痕·内面に小枝混入
第8図	15	A-2	一括	SD-04	高台	脚部		1.6		6.6	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	微細な角閃石	普通	高台高0.9cm
第8図	21	B-2	一括	P?4	壷	胴部		6.8			浅黄橙色	灰色	ハケ目	ケズリ	微細な石英·角閃石·微砂粒	良好	
第13図	39	B-3	13	包含層	坏		8.0	1.4	0.7	6.2	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	微砂粒	良好	
第13図	40	A-2	13	包含層	碗		13.0	3.1	1.2	9.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	微細な雲母·角閃石	良好	
第13図	41	B-2	13	包含層		底部		1.7	1.0	9.2	にぶい黄橙色	にぶい橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	微砂粒	良好	
第13図	42	B-2	13	包含層		底部		2.1	1.2	8.2	にぶい黄橙色	にぶい橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	微細な角閃石	良好	
第13図	43	A-2	13	包含層		底部		1.5	1.0	8.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	微細な石英·角閃石	良好	
第13図	44	A-2	13	包含層		底部		1.4	0.8	7.2	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	角閃石	良好	
第13図	45	A-2	13	包含層				1.1	1	8.4	にぶい褐色	橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	角閃石·微細な雲母	良好	
第15図	81	C-1	12	包含層		底部		1.4		5.8	橙色	にぶい褐色	ヨコナデ·回転ヘラミガキ	ヨコナデ	微細な雲母	良好	高台高0.6cm，全面に赤彩
第15図	82	D-2	12	包含層		底部		2.4		8.0	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ナデ	微細な石英	良好	高台高0.7cm，貼付け高台，外面に赤彩
第15図	83	D-2	12	包含層		底部		1.7		8.8	にぶい褐色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	微細な雲母·角閃石	良好	底部内外面に赤彩
第15図	84	C-2	12	包含層		底部		1.8		8.2	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ヨコナデ	微細な雲母·角閃石	良好	底部外面に糸切痕
第15図	85	C-1, C-2	12	包含層	坏	口縁部	9.2	1.6		7.2	浅黄色	灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	微細な雲母	良好	底部外面に糸切痕
第15図	86	D-2	12	包含層		底部		1.9		10.6	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	微細な雲母	良好	底部外面に糸切痕
第15図	87	D-2	12	包含層	坏	底部		1.3		6.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	微細な雲母·角閃石	良好	底部外面に赤彩·糸切痕
第15図	88	D-2	12	包含層	坏		14.0	2.4		11.0	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	微細な雲母·石英	良好	底部外面に糸切痕
第15図	89	C-2	12	包含層		底部		2.2		10.6	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	ナデ·回転ナデ	微砂粒	良好	底部外面に糸切痕
第21図	123					底部		1.9	0.9	8.8	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	微砂粒·雲母	良好	
第21図	124					底部		2.3		10.0	灰褐色	暗灰色	回転ヨコナデ	ミガキ	微砂粒·角閃石	良好	内面にスス付着

須恵器観察表

図版番号	遺物番号	グリッド	層位	遺構	器種	部位	口径	現存高	器厚	底径	外面	内面	外面	内面	胎土混入物	焼成	備考
第8図	11	A-2	一括	SD-04·05	壷	口縁部	18.2	5.1			暗灰色	灰色	ヨコナデ·格子状のタタキ	ヨコナデ·ハケ目後ヨコナデ	微砂粒	良好	
第13図	46	A-2	13	包含層		口縁部		4.4			灰色	オリーブ黒色	回転ナデ	ナデ	微砂粒	良好	内面に自然釉
第13図	47	A-2	13	包含層	鉢	口縁部		3.3	0.8		灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	良好	口縁部外面のみ灰色
第13図	48	C-1	13	包含層		口縁部		4.8	0.6		灰色	黄灰色	回転ナデ	ナデ	微砂粒	良好	
第13図	49	C-1	13	包含層	鉢	口縁部	12.6	3.1	0.7		灰黄色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒·微細な石英	良好	口縁部外面のみ灰色
第21図	125	C-1		包含層	坏	底部		2.2	0.7	8.6	灰色	灰色	ナデ	回転ナデ	微砂粒	良好	底部外面に糸切痕

第4表　遺物観察表（3）

瓦観察表

図版番号	遺物番号	グリッド	層位	遺構	器種	部位	現存長	幅	厚	凹面	凸面	胎土混入物	凹面	凸面	側面	焼成	備考
第10図	30	B-2	13	包含層	丸瓦		10.6	5.8	2.2	灰黄色	黄灰色	微砂粒	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第10図	31	B-2	13	包含層	丸瓦		7.2	5.3	2.0	黄灰色	灰色	微砂粒	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第10図	32	B-2	13	包含層	丸瓦	端部	3.3	5.8	2.1	灰色	灰色	細砂粒･微細な石英･角閃石	布目圧痕	ナデ	面トリ	良好	
第10図	33	B-2	13	包含層	丸瓦	端部	5.5	6.8	2.2	にぶい橙色	にぶい黄橙色	細砂粒	布目圧痕	不明	未調整	良好	
第11図	34	B-2	13	包含層	丸瓦	端部	5.9	10.2	1.8	灰黄色	灰色	微砂粒	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第11図	35	B-1	13	包含層	丸瓦		11.3	9.8	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細砂粒	布目圧痕	縄目圧痕	一部面トリ	良好	
第12図	36	C-1	13	包含層	平瓦		9.1	8.3	2.0	灰白色	灰黄色	微細な石英･角閃石	布目圧痕	縄目圧痕		良好	
第12図	37	D-1	13	包含層	平瓦		5.7	4.7	2.0	灰色	灰色	微砂粒	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	穿孔あり
第12図	38	B-1	13	包含層	平瓦	端部	6.8	6.0	2.1	灰オリ?ブ色	灰色	微砂粒･微細な石英	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第16図	90	D-1	12	包含層	丸瓦		7.2	10.5	1.8	灰黄褐色	灰黄褐色	長石･石英	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第16図	91	D-1	12	包含層	平瓦	端部	5.5	6.1	2.3	灰白色	灰色	微砂粒･長石	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第17図	92	D-2	12	包含層	平瓦	端部	6.7	9.9	2.2	灰白色	灰白色	微砂粒･微細な長石	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第17図	93	D-2	12	包含層	平瓦	端部	4.8	7.2	1.8	黄褐色	灰褐色	微砂粒･赤褐色砂粒･長石	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第17図	94	C-2	12	包含層	平瓦	端部	6.0	5.7	1.6	灰黄色	灰黄色	砂粒･角閃石	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第18図	95	D-2	12	包含層	平瓦	端部	4.3	5.7	1.7	灰白色	灰色	微砂粒･長石	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第18図	96	C-2	12	包含層	平瓦	端部	5.4	5.8	2.8	にぶい橙色	灰黄色	微細な長石･石英	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第18図	97	D-2	12	包含層	平瓦		4.2	5.4	2.1	褐灰色	褐灰色	微砂粒･長石･赤褐色砂粒	ナデ	ナデ		良好	
第18図	98	C-1	12	包含層	平瓦		4.3	5.0	2.0	にぶい黄橙色	灰黄褐色	微細な長石	布目圧痕	ナデ	面トリ	良好	
第19図	99	D-2	12	包含層	平瓦	端部	5.8	6.1	2.0	灰白色	灰黄褐色	微砂粒･角閃石･長石･赤褐色砂粒	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第19図	100	D-2	12	包含層	平瓦	端部	5.6	6.0	1.9	灰色	灰色	微砂粒	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第19図	101	C-1	12	包含層	平瓦	端部	3.3	8.1	2.0	浅黄色	黄灰色	細砂粒･微細な長石	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	
第19図	102	D-2	12	包含層	平瓦	端部	4.8	4.6	1.5	灰黄褐色	灰黄褐色	角閃石･長石･石英	布目圧痕	縄目圧痕	面トリ	良好	

瓦質土器観察表

図版番号	遺物番号	グリッド	層位	遺構	器種	部位	口径	現存高	器厚	底径	外面	内面	外面	内面	胎土混入物	焼成	備考
第13図	50	B-1	13	包含層		口縁部	18.6	4.4	0.9		灰白色	灰白色	回転ナデ･ナデ	回転ヨコナデ	角閃石	良好	口唇部は面トリ･ヨコナデ
第13図	51	B-2	13	包含層		口縁部	25.2	5.4	0.7		黄灰色	黄灰色	ヨコナデ･指ナデ	ヨコナデ	微細な砂粒	良好	口縁部外面のみう黄灰色
第13図	52	B-2	13	包含層	鉢	口縁部	29.0	6.4	1.2		灰色	灰色	ヨコナデ･指頭圧痕	ハケ目	微細な石英･角閃石	良好	口唇部は面トリ･ヨコナデ

第5表　遺物観察表（4）

陶磁器類観察表

図版番号	遺物番号	グリッド	層位	遺構	種別	部位	器種	口径	底径	現存高	器厚	高台高	高台径	外面	内面	外面	内面	胎土混入物	焼成	備考
第8図	16	A-2	一括	SD-04·05	青磁		碗			2.6				灰オリーブ色	灰オリーブ色	蓮弁文·施釉	ヨコナデ·施釉	灰白土	良好	
第8図	17	A-2	一括	SD-04	青磁	口縁部	碗	16.0		3.7				灰オリーブ色	灰オリーブ色	ナデ·横目文·施釉	ナデ·花文·施釉	灰白土	良好	内面に一条の沈線
第14図	53	B-2	13	包含層	青磁					3.1	0.9			オリーブ灰色	オリーブ灰色	蓮弁文·施釉	ナデ·施釉	灰白土	良好	
第14図	54	B-3	13	包含層	青磁	口縁部				3.2	0.4			灰オリーブ色	灰オリーブ色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	
第14図	55	B-2	13	包含層	青磁	口縁部				2.2	0.4			明緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰白土	良好	全体に貫入
第14図	56	A-2	13	包含層	青磁	口縁部				2.9	0.5			明緑灰色	明緑灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	全体に貫入
第14図	57	B-2	13	包含層	青磁					3.2	0.7			オリーブ灰色	オリーブ灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	一部に貫入
第14図	58	B-2	13	包含層	青磁					3.1	0.6			灰オリーブ色	灰オリーブ色	蓮弁文·施釉	施釉	灰色土	良好	
第14図	59	A-2	13	包含層	青磁					2.8	0.8			暗オリーブ色	暗オリーブ色	蓮弁文·施釉	ナデ·施釉	暗灰黄土	良好	
第14図	60	B-1	13	包含層	青磁					3.7	0.8			灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	劃花文·施釉	灰白土	良好	外面に一部貫入
第14図	61	B-2	13	包含層	青磁	口縁部	碗	12.4		2.5	0.4			オリーブ灰色	オリーブ灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	
第14図	62	C-2	13	包含層	青磁	口縁部	碗	13.4		4.0	0.6			灰オリーブ色	灰オリーブ色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	全体に貫入
第14図	63	D-1	13	包含層	青磁	底部	碗		5.4	4.4		0.3	4.4	灰オリーブ色	灰オリーブ色	蓮弁文·施釉	施釉	灰色土	良好	見込み·高台の付け根の釉が厚い、高台部は釉をかき取る
第14図	64	A-2	13	包含層	青磁	口縁部	碗	13.4		3.4	0.4			灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白土	良好	口唇部は釉なし
第14図	65	B-1	13	包含層	青磁					2.6	0.6			オリーブ黄色	オリーブ黄色	施釉	施釉	灰白土	良好	
第14図	66	A-2	13	包含層	青磁					2.0	0.7			灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰白土	良好	
第14図	67	B-1	13	包含層	白磁	口縁部	碗	10.6		2.6	0.4			灰白色	灰白色	ヨコナデ·施釉	ナデ·施釉	灰白土	良好	
第14図	68	A-2	13	包含層	白磁	口縁部	碗	13.4		2.8	0.5			灰白色	灰白色	ロクロナデ·施釉	施釉	微砂粒	良好	
第14図	69	A-2	13	包含層	白磁	底部			6.8	1.5		0.6	6.0	灰白色	明オリーブ灰色	ナデ	ナデ·施釉	微砂粒を含む灰白土	良好	
第20図	103	C-2	12	包含層	青磁	口縁部	碗	15.0		3.6				オリーブ灰色	オリーブ灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	
第20図	104	D-2	12	包含層	青磁	口縁部	碗	15.8		1.9				オリーブ灰色	オリーブ灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	
第20図	105	D-1	12	包含層	青磁	口縁部	碗	14.6		2.2				緑灰色	緑灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	
第20図	106	C-1·D-1	12	包含層	青磁	口縁部	碗	15.2		4.1				オリーブ灰色	オリーブ灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	
第20図	107	C-1·D-2	12	包含層	青磁	口縁部	碗	12.8		5.8				オリーブ灰色	オリーブ灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	
第20図	108	C-1	12	包含層	青磁	口縁部	碗	14.2		3.7				緑灰色	緑灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰色土	良好	
第20図	109	C-2	12	包含層	青磁	口縁部	碗	12.3		3.4				緑灰色	緑灰色	蓮弁文·施釉	施釉	灰白土	良好	
第20図	110	C-2	12	包含層	青磁	口縁部	碗		6.4	3.0		0.6	4.8	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	劃花文·施釉	灰白土	良好	高台部は釉をかき取る
第20図	111	C-2	12	包含層	青磁	口縁部	碗	16.0		2.8				灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	劃花文·施釉	灰白土	良好	
第20図	112	C-2·D-2	12	包含層	青磁	口縁部	碗	14.6		3.1				灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	劃花文·施釉	灰白土	良好	
第20図	113	D-2	12	包含層	白磁	底部			4.6	1.6		0.6	3.6	明オリーブ色	明オリーブ色·灰オリーブ色	施釉	施釉·ヨコナデ	微砂粒	良好	
第20図	114	D-1	12	包含層	白磁	口縁部	碗	16.5		3.8				灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白土	良好	
第20図	115	C-1	12	包含層	白磁	口縁部	碗	14.4		3.4				灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白土	良好	
第20図	116	D-1	12	包含層	白磁	底部			8.4	2.4		0.5	6.0	暗灰黄色	灰オリーブ色	回転ナデ	施釉	微細な石英	良好	
第20図	117	D-2	12	包含層	白磁	口縁部	碗	16.6		3.2				灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白土	良好	内面に一条の沈線
第21図	126	B-2南			青磁	口縁部	碗	16.8		3.7				オリーブ灰色	オリーブ灰色	蓮弁文·施釉	ナデ·施釉	灰色土	良好	
第21図	127	D-2西			青磁	口縁部	碗	12.8		4.1				緑灰色	緑灰色	蓮弁文·施釉	ナデ·施釉	灰色土	良好	
第21図	128	C-2			青磁	口縁部		12.6		1.6				灰色	灰色	ナデ·施釉	ナデ·施釉	灰色土	良好	全体に貫入
第21図	129	A-2			青磁	口縁部		11.0		1.6				オリーブ灰色	オリーブ灰色	ヨコナデ·施釉	櫛描文·施釉	微細な石英	良好	
第21図	130	A-1			青磁	底部	高台		6.8	1.5		0.5	4.8	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	回転ナデ·施釉	灰白土	良好	高台部は釉をかき取る
第21図	131	D-1	一括	トレンチ	白磁	口縁部		13.6		3.3				明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	施釉	施釉	灰白土	良好	
第21図	132	D-1	一括	トレンチ	白磁	口縁部		13.6		2.7				黄褐色	黄褐色	施釉	櫛描文·施釉	微砂粒	良好	
第21図	133	B-2			近代磁器	口縁部		9.4		2.3				明緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰色土	良好	

自然科学分析調査報告書

―熊本県、二本木遺跡―

株式会社 古環境研究所

熊本県、二本木遺跡群におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984）。

2．試料

調査地点は、Ｂ１区西壁とＢ２区の２地点である。Ｂ１区西壁では、８層下部から14層までの層準から12試料が採取された。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。また、Ｂ２区では水田層とみられる11層から３試料が採取された。試料数は合計15点である。

3．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに対して直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な５分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１、２に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5．考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ

5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

（1）Ｂ１区西壁（図１）

7層下部（試料１）から14b層（試料12）までの層準について分析を行った。その結果、7層下部（試料１）、8層上部（試料２）、12層（試料５）、13a層（試料７、８）、13b層（試料９、10）の各層準からイネが検出された。このうち、水田層とみられる13a層（試料７、８）では、密度が9,200～9,800個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。また、13b層（試料９）でも7,500個/gと高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が700～1,500個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、１）稲作が行われていた期間が短かったこと、２）洪水などによって耕作土が流出したこと、３）土層の堆積速度が速かったこと、４）稲藁が耕作地以外に持ち出されていたこと、５）採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

（2）Ｂ２区（図２）

水田層とみられる13層（試料１～３）について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。密度は5,300～9,900個/gといずれも高い値である。したがって、同層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

６．まとめ

以上のように、水田層とみられる13層では、すべての試料からイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、14層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

参考文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表1　熊本県、二本木遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：100個/ｇ）

	B1区西壁										B2区		
分類群＼試料	1	2	3	5	7	8	9	10	11	12	1	2	3
イネ	7	15		8	92	98	75	15			82	99	53
ヒエ属型				8	8								
ヨシ属	7		8	8	8	8	15	8	15	23	22		23
ススキ属型	37	23	38	39	23	38	15	15		23	52	38	38
タケ亜科	37	15	8	15	15	8	8	30	31	15			23

推定生産量（単位：kｇ/m^2・cm）

イネ	0.22	0.44		0.23	2.71	2.87	2.22	0.44			2.41	2.91	1.56
ヒエ属型				0.65	0.64								
ヨシ属	0.47		0.48	0.49	0.48	0.47	0.95	0.47	0.98	1.45	1.41		1.43
ススキ属型	0.46	0.28	0.47	0.48	0.29	0.47	0.19	0.19		0.28	0.65	0.47	0.47
タケ亜科	0.18	0.07	0.04	0.07	0.07	0.04	0.04	0.14	0.15	0.07			0.11

※資料の仮比重を1.0と仮定して算出。

型

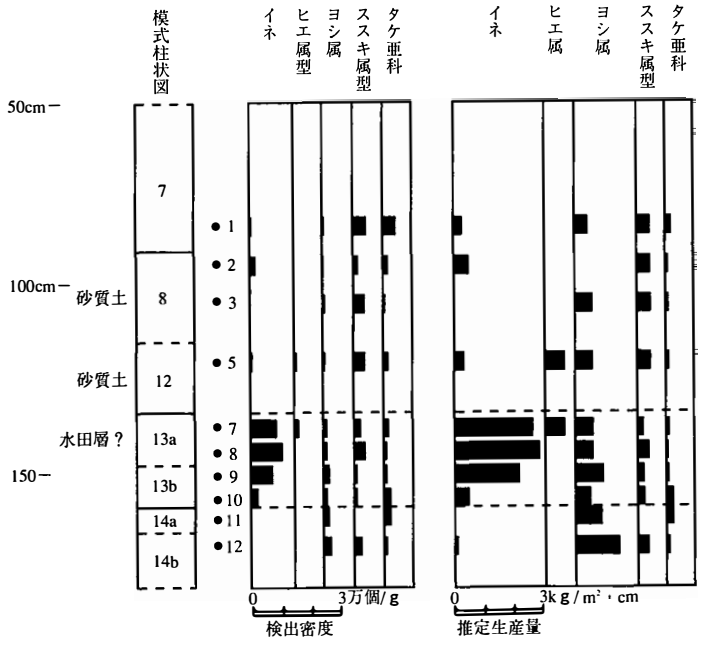


図1　二本木遺跡、B1区西壁におけるプラント・オパール分析結果

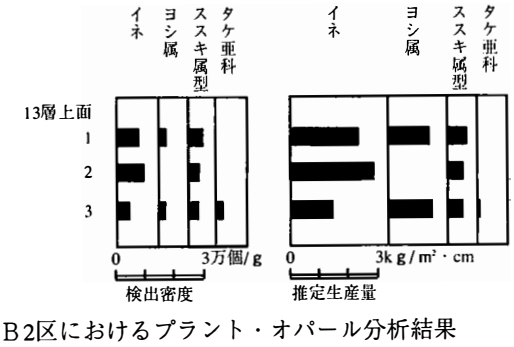


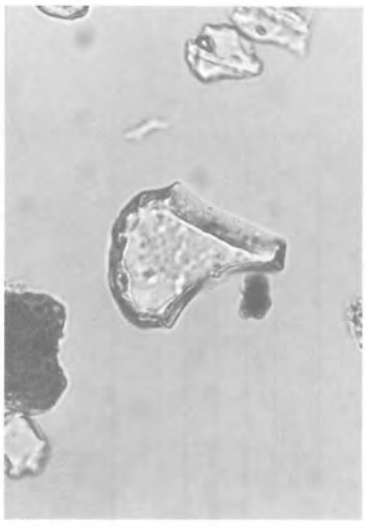
図2　B2区におけるプラント・オパール分析結果

植物珪酸体の顕微鏡写真

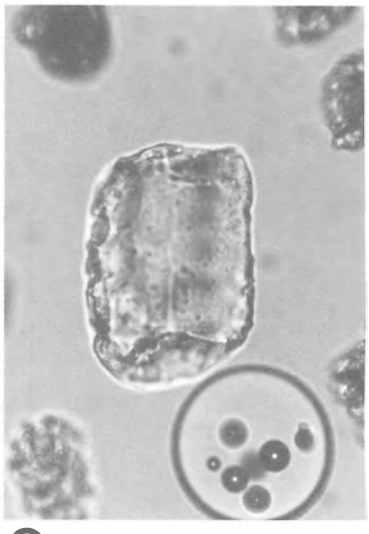
（倍率はすべて400倍）

No.	分　類　群	地点	試料名
1	イネ	B1区西壁	9
2	イネ	B1区西壁	7
3	ヒエ属型	B1区西壁	7
4	ヨシ属	B2区	1
5	ススキ属型	B1区西壁	8
6	メダケ節型	B1区西壁	5
7	クマザサ属型	B2区	3
8	表皮毛起源	B2区	1
9	ブナ科（シイ属）	B2区	2

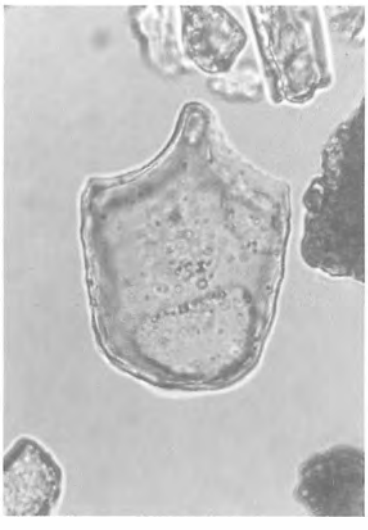
❶



❷

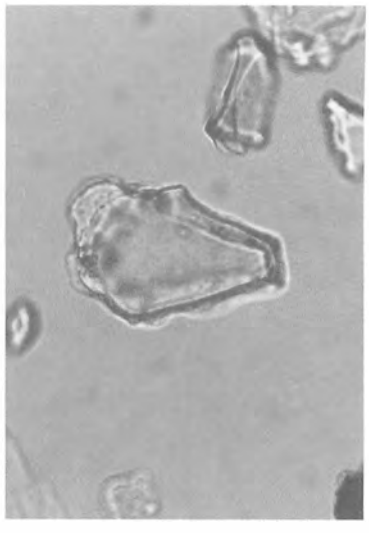


❸

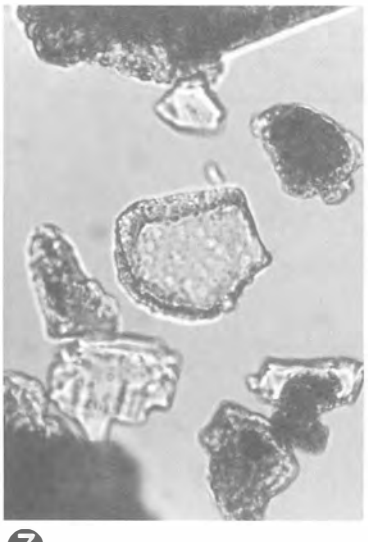


❹

❺

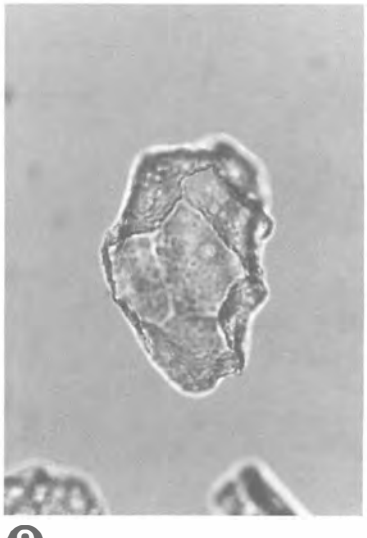


❻



❼

❽



❾

写　真　図　版

遺跡上空から金峰山を望む

調査区周辺航空写真

図版二

調査区全景

国府推定地（古町小学校周辺）

調査終了状況
（南から）

調査終了状況
（北から）

ピット群
（南から）

図版四

調査区基本土層

B1区西壁基本土層
（竹グシはプラント
オパール分析対象）

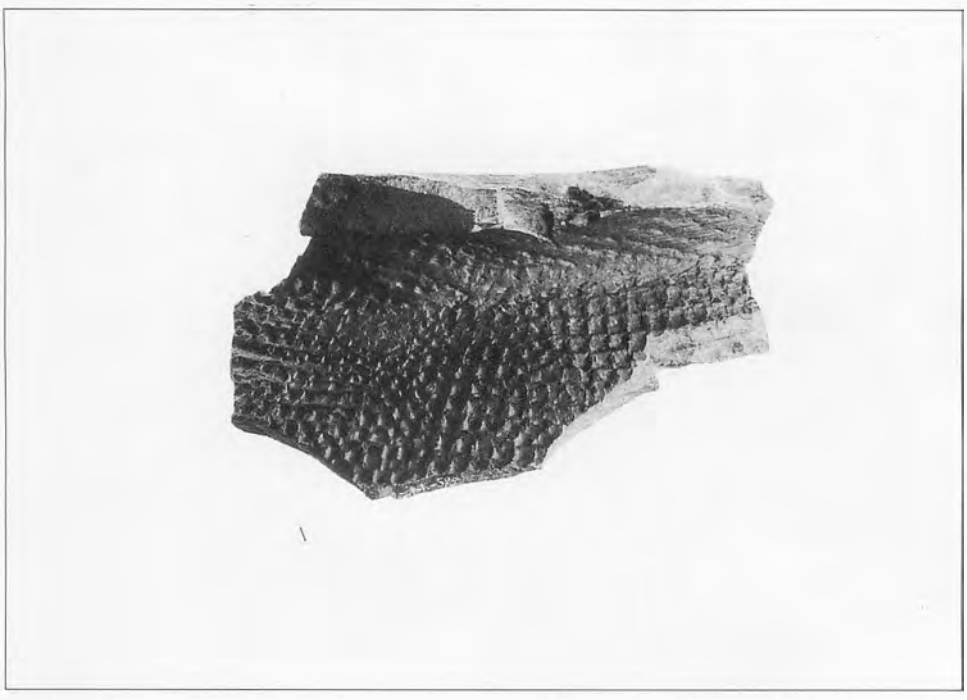
調査区内土層断面
（南から）

SD04,05
（東から）

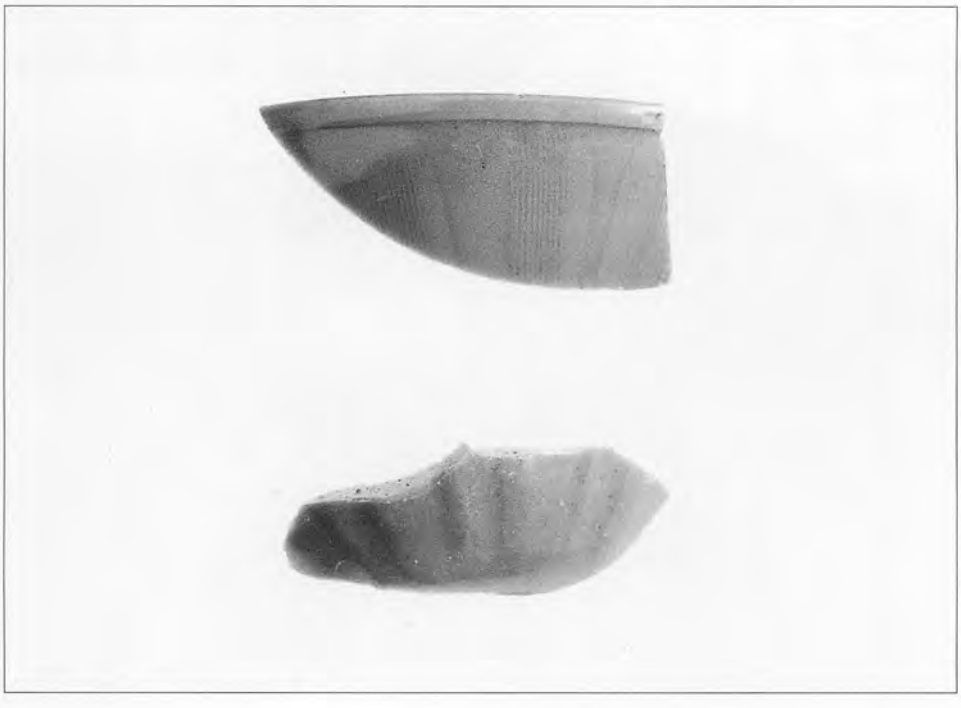
SD04土層断面
（東から）

SD05土層断面
（東から）

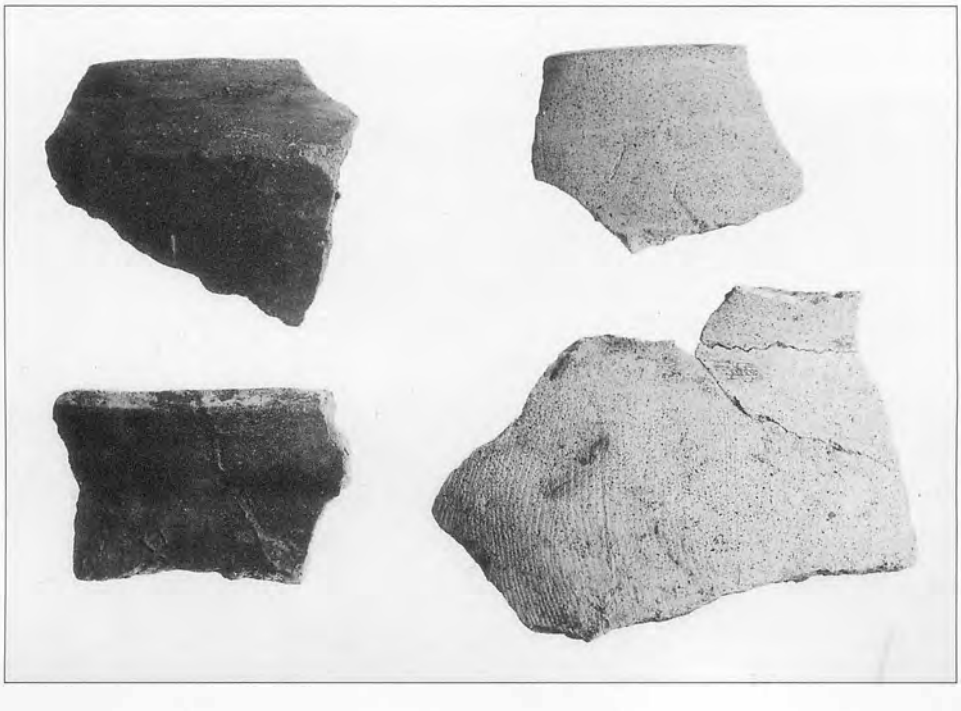
図版六



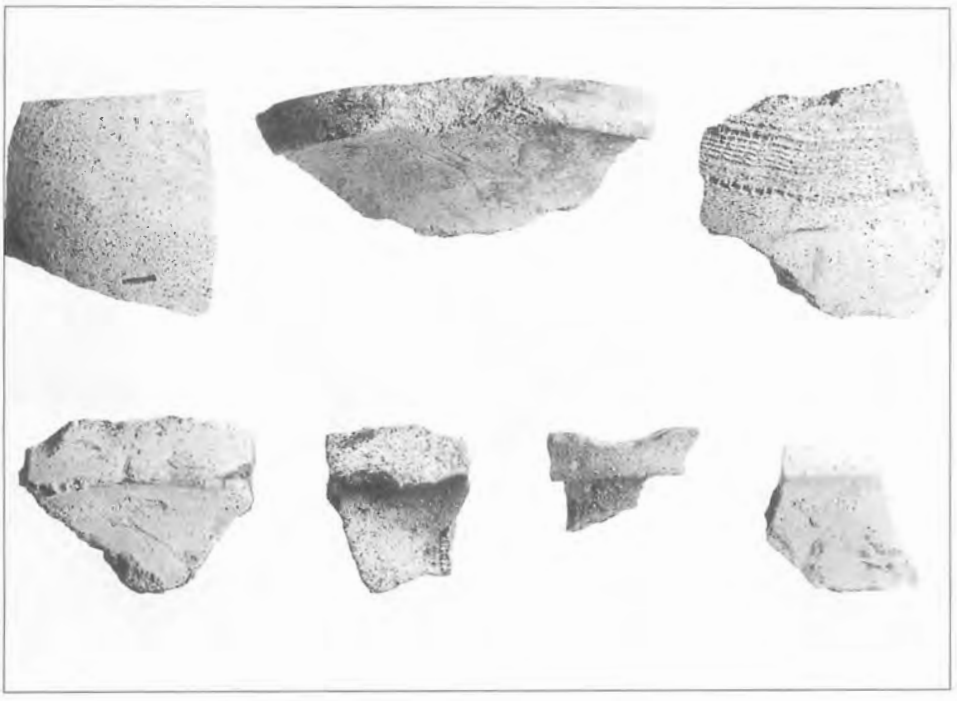
須恵器



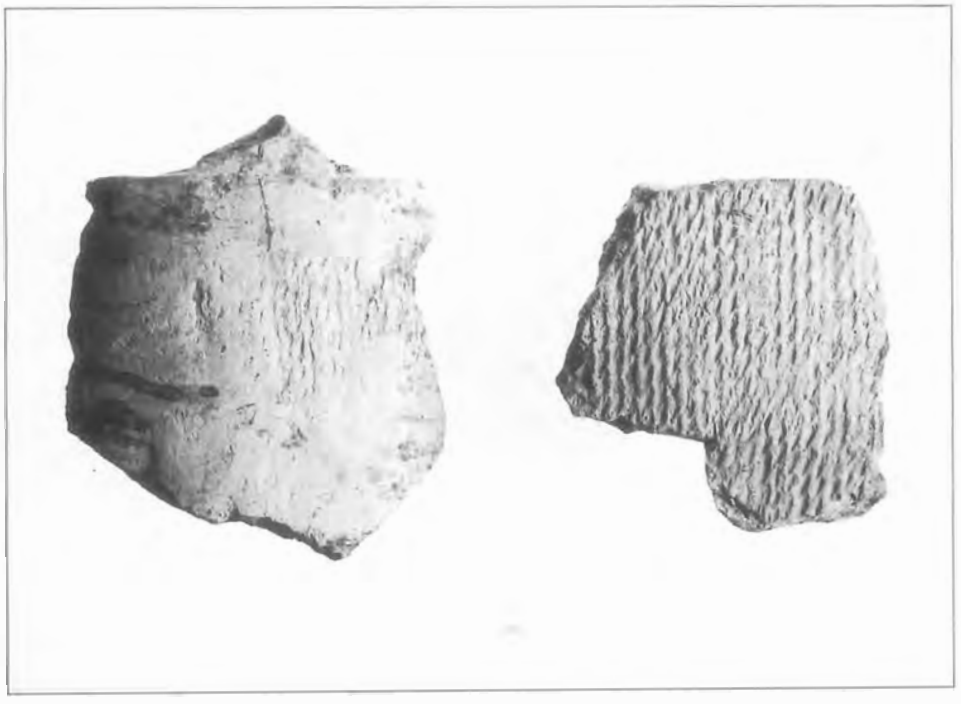
青磁



縄文土器・弥生
土器・土師器



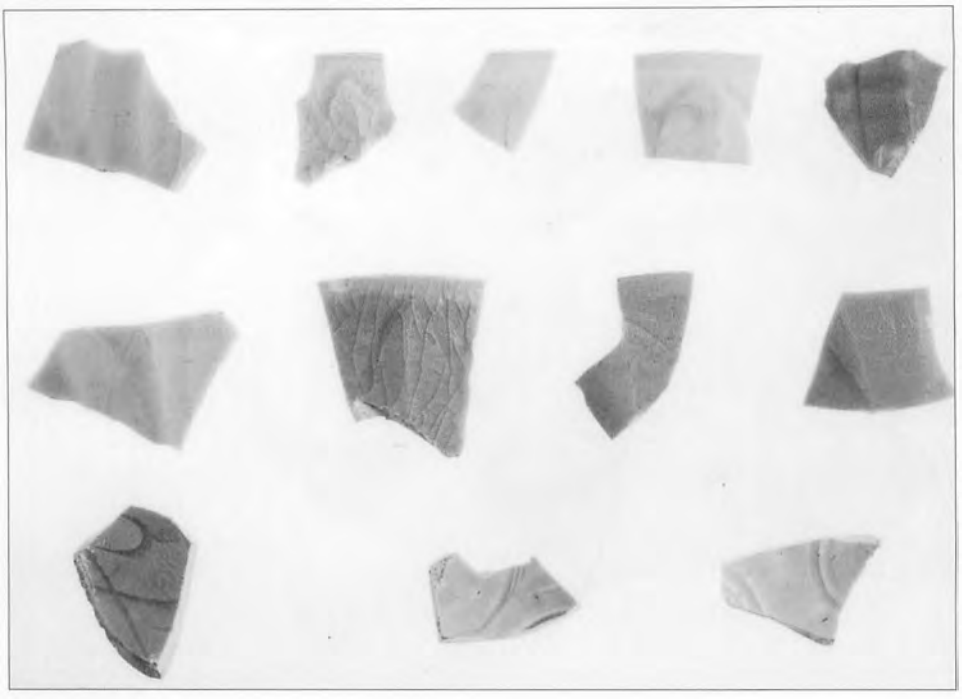
弥生土器



瓦

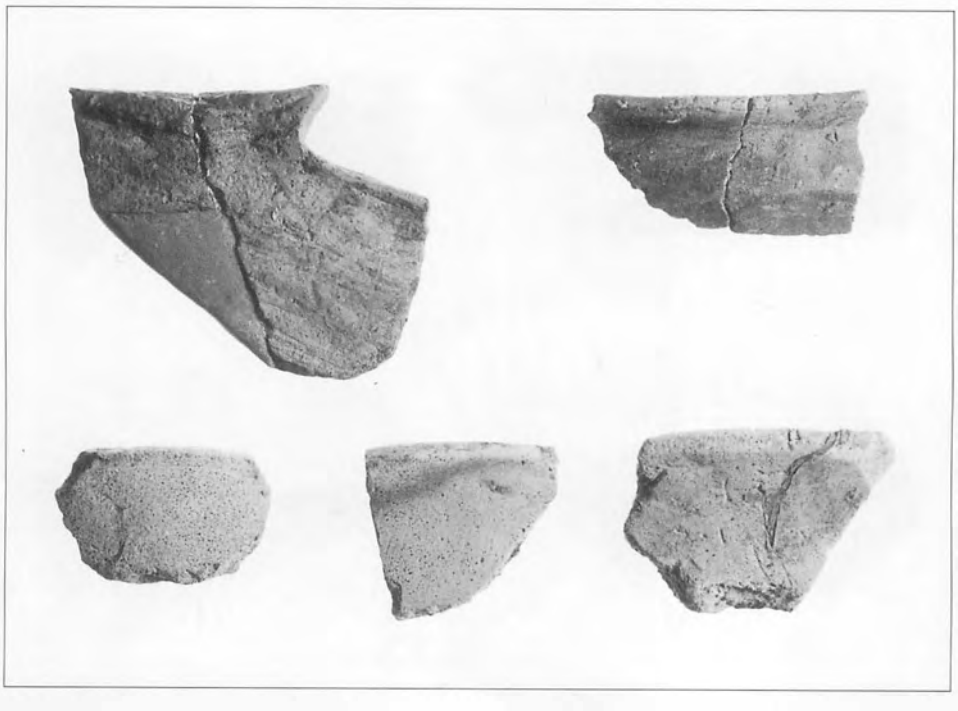
瓦質土器ほか

図版八



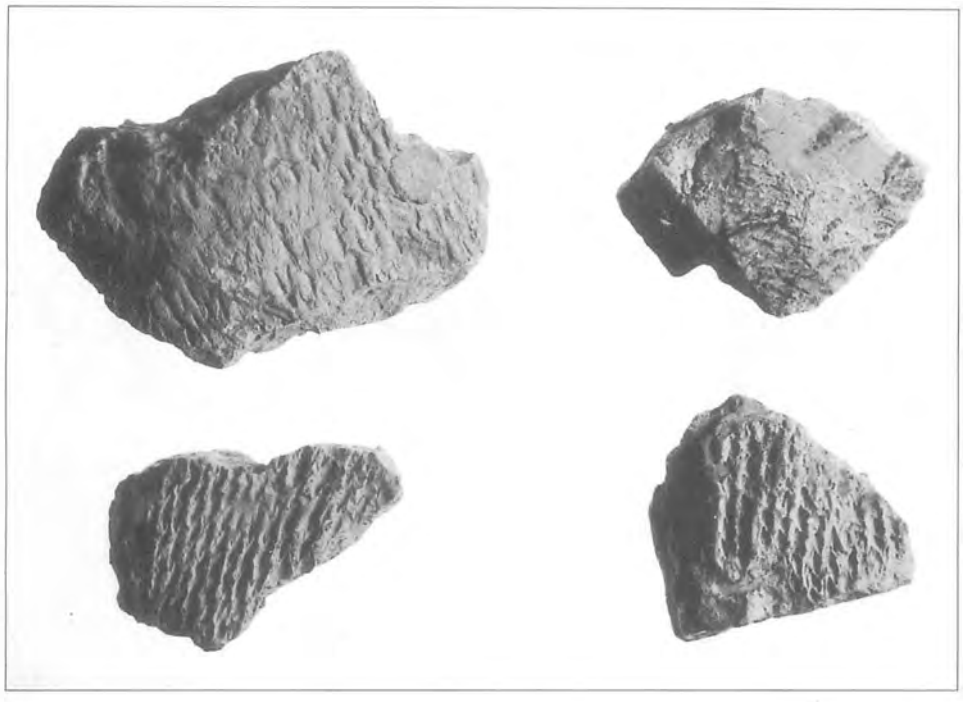
青磁

青磁

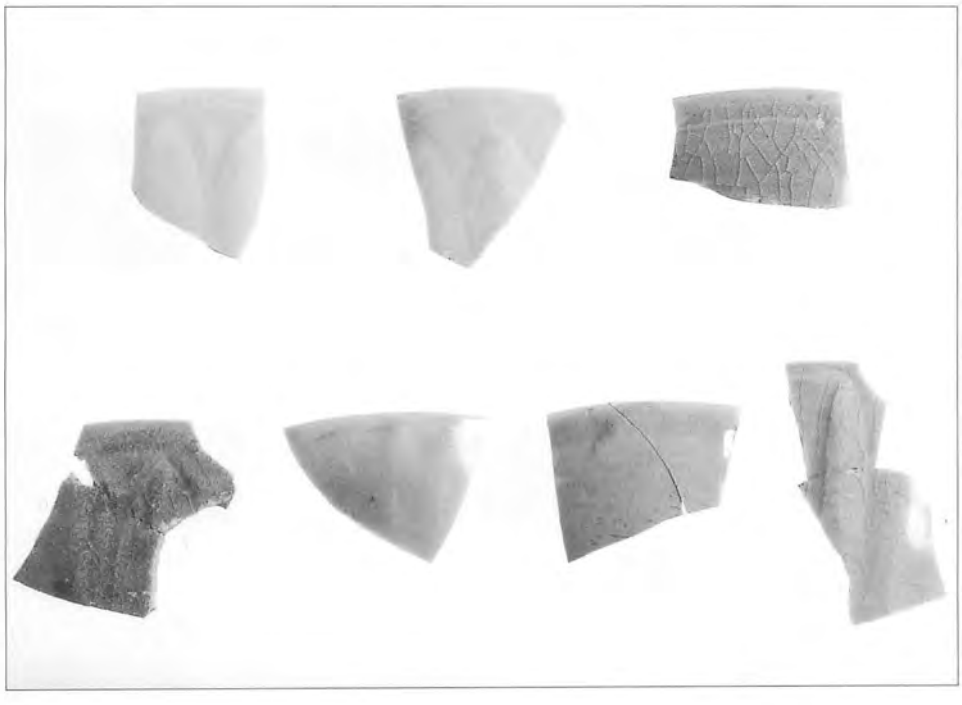


縄文土器・弥生土器

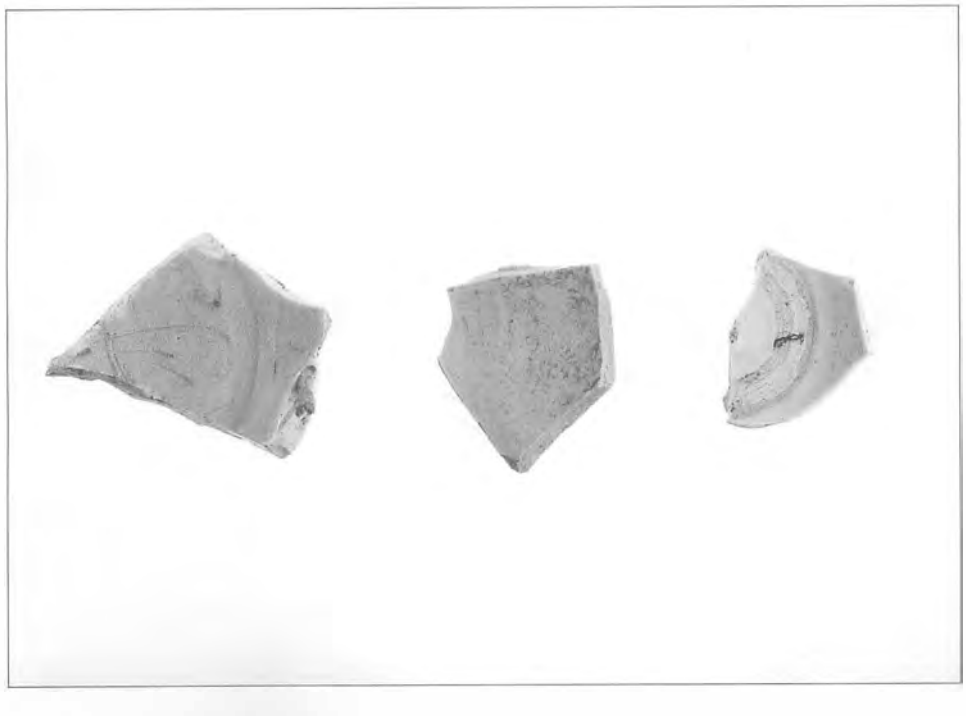
図版九



瓦

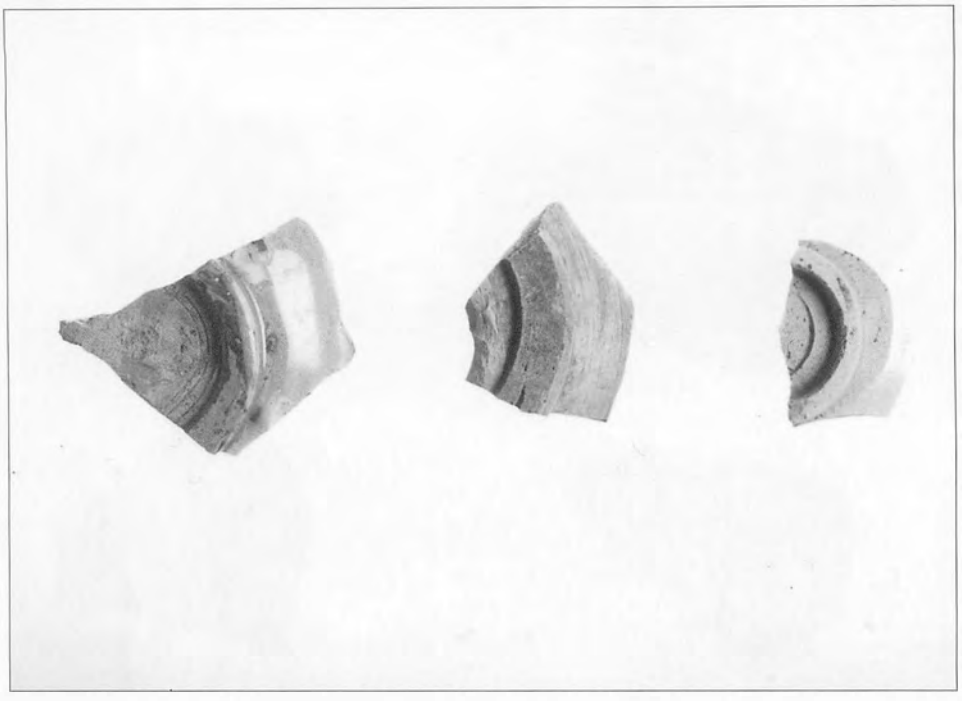


青磁

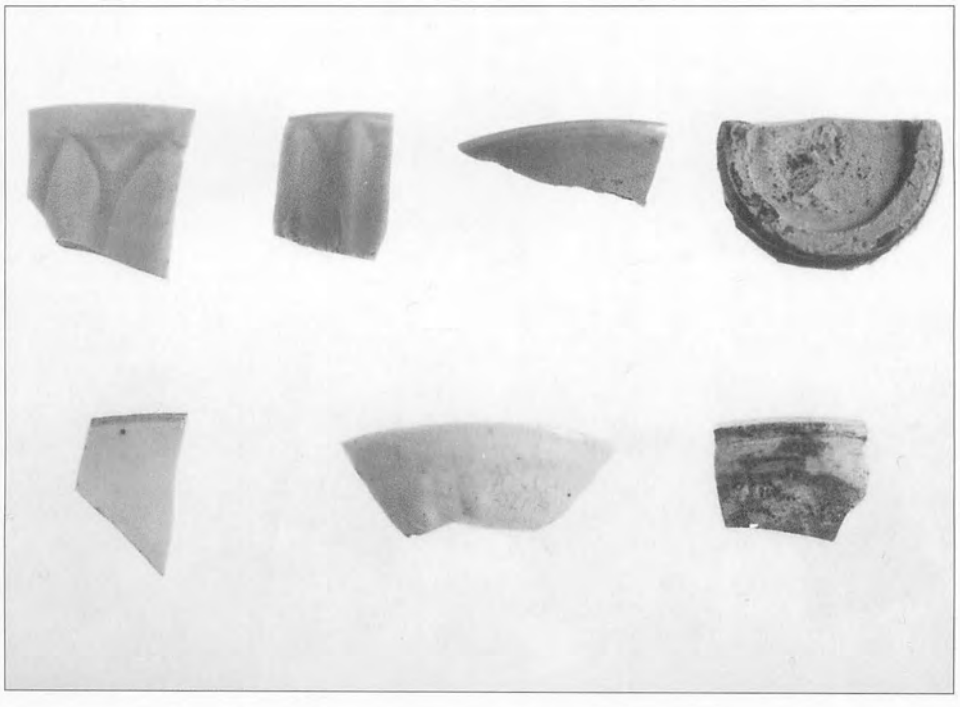


青磁

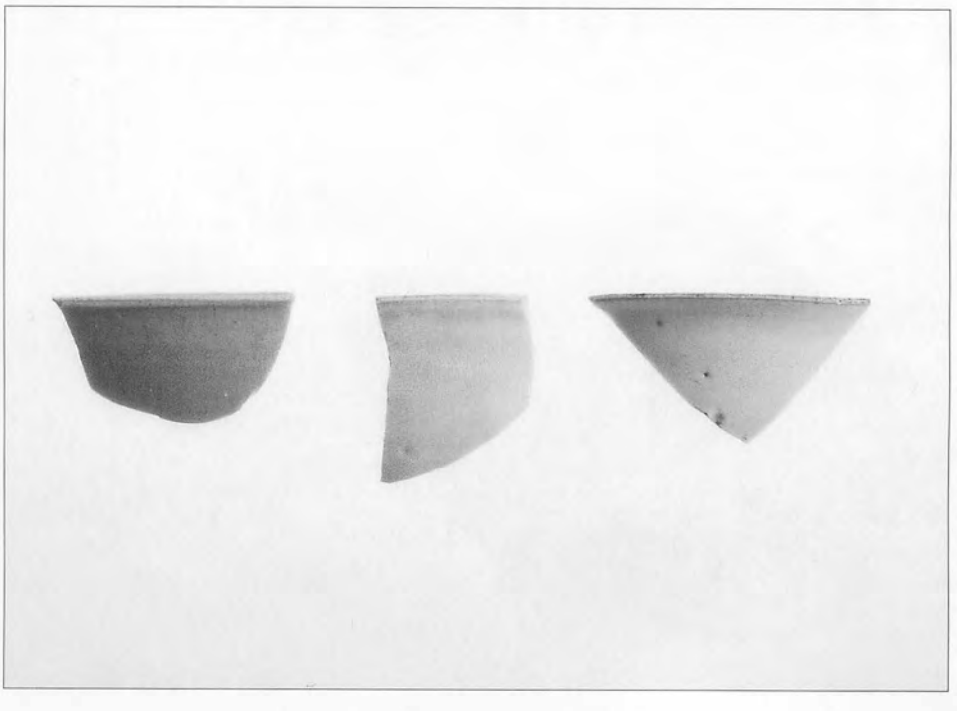
図版十



青磁・白磁



陶磁器類



陶磁器類

報告書抄録

ふりがな	にほんぎいせきぐん
書名	二本木遺跡群
副書名	整備新幹線駅整備調整事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告書
シリーズ番号	第174集
編著者名	帆足俊文
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	1999年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にほんぎ 二本木	くまもとしたさき 熊本市田崎1丁目 117番の1	43201	265			平成8年1月29日 ～ 平成8年3月25日	707m²	整備新幹線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二本木	包蔵地	縄文時代 弥生時代 中期 後期 古墳時代 古代 中世 近世	溝 ピット	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 布目瓦 青磁 白磁	

熊本県文化財調査報告　第１７４集

二　本　木　遺　跡　群

平成11年３月３１日

編集発行　熊本県教育委員会
〒862-0011 熊本市水前寺６丁目１８番１号

印刷　(株)新日本印刷
〒861-4109 熊本市日吉２丁目12番32号

10　教　教文
②　006

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 174 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：二本木遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日